911.12-143ウ
12005007550 74
911.12
43

始

911.12
I.43

萬葉讀本

東京
第一書房

903
57

はしがき

おほけなき業と知りながら、雑誌「令女界」からの依頼により、昭和十三年の八月から同十五年の四月まで足掛三年に亙つて、毎月少しづつではありましたが萬葉集のなかの歌を抄出して、これに出來るだけ解りやすく解釋をつけました。

「萬葉集は古事記、日本書紀と共に我が國最古の古典として底深い、蒼古たる光を輝かしてゐる大切な我が國民的一大歌集であります。」近年萬葉集の研究が盛大となり斯界の權威ある萬葉學者によつて優れた註釋の良書が世に出てゐます。現代に於て萬葉を學びたいと冀ふ人人は誠に恵まれた有難い御代を感謝すべきだと存じます。私の此の拙い書を世に送る大いなる目あては、かつて自分が、明治四十年頃はじめて萬葉集を讀みました時、その理解に苦しみ、どうか初歩の人もよく解るやうにしかも素(もと)の味を失はぬやうに書いた解釋の本を讀みたいものと、切

に冀うた其の時の切なる願ひに基をおいて、ほんたうの初歩の人の爲に、ごく解りやすく各卷からすぐれた歌、解釋のしやすい歌を選んで、きはめて解りやすく釋いてみたい、といふ考へで筆をとつてみたのであります。

前に述べました如く萬葉の歌は日本の古典のなかでも最も古い古典といふのでありますから、之を完全に解釋するのはなまやさしい學問や知識では成し得るものではありません。その點から申しますれば私など到底及ばぬ所であります。然し私は唯萬葉集の歌が好きで其の研究勉强は純粹に我が民族の血液の源泉にたづね入りゆく清清しき業であり、樂しさを味はふ事であると知りまして、卽ちこちらの感受も感動も純粹になり眞實になる自然の淨めの業を信じて及ばぬまでも力を盡すべきだと存じまして、信仰によつて私は凡そ現代の家庭婦人の爲に自分の曾て苦しんだ所をよく解き明して、お一人でも多く此の得難い書の深奥な味の片鱗なりともお知らせしたくて此の大業の一端に手をつけた次第であります。

書き方にしましても十分とは申せませんが、歌の上に示した數字は國歌大觀が附した番號でありまして、萬葉集をお讀みになる時の便利にと思うて附しておきました。歌はまだまだ解釋いたしたく、特に卷十四の東歌、卷二十の防人の歌等は心苦しきまでに、よい歌を後にのこしてあります。又、卷一、二、三、四には優れた歌を殘してしまひました。額田王のお歌、磐姫皇后のお歌、倭姫皇后のお歌等、もつと委しく釋いてみたかつたのですが、時代的に不自由な所もあり十分心を盡す事が出來なかつたのを遺憾といたします。

思ひみれば、女の身を以て古來困難とされた萬葉の歌を、たとへ一部なりとも正面に人に對して語り得たといふ事を思ふと、感慨無量の思ひがいたします。之が機緣となつて一人でも多く萬葉集の歌を知つて、其の研究に志す婦人が出られますやうに、謹みて、天つ神、國つ神に祈願し奉ります。

庭躑躅咲き盛る五月中の六日

邦子謹書

目次

第一講……五
第二講……一六
第三講……二六
第四講……三六
第五講……四七
第六講……五八
第七講……六八
第八講……七九
第九講……八九
第十講……九九
第十一講……一〇九
第十二講……一一九
第十三講……一二九
第十四講……一三八
第十五講……一四九
第十六講……一五九
第十七講……一六九
第十八講……一七九
第十九講……一八九
第二十講……一九八
第二十一講……二〇八
第二十二講……二一七

萬葉讀本

第一講

萬葉集といへば、今からいつて千年も以前の人人からさへ、なかなか難解な歌集と思はれて居りました。それにもかかはらず、歌やその他の文學を愛好する人人によつて、たとへその量はわづかしか解されなかつたといへども、その價値を高く買はれ、その味の深さに驚嘆されて居りました。

卽ち平安朝時代から今日に至るまで、その讀み方なり、解釋なりにどうしても分らないといふものがあるところをみると、成程難解な書であることは事實ですけれど、私はその難解な點にふれて此處でかれこれ言ふつもりはありません。嵐雲が厚く空を覆うてゐるとしても吹き切られた雲の間に眞青な空が現はれて見えます。

さういふやうに、私は自分に深く印象を受けた萬葉集の歌ばかりについて、多くの人に分るやうに解釋して、せめて、我が國の萬葉集といふものが、いかに得がたい古典文學であるかといふことの、ほんの端緒を知つていただきたい願ひで、ごく解りやすいその解釋と鑑賞の筆をとつてみようと思ひます。

キリスト教のうちの新教の創立者であるマルチン・ルーテルは、聖書は分つても分らなくても讀む方がよろしい、分らないところは帽子を脱つて、禮してそこを通りすぎ、分るところは分るよろこびを得てゆくやうに、といふ意味のことを言はれて居りますが、これは全くおもしろい言葉で、人間の身をもつて始めて聖書を通讀したところで、その深奥な神の道が全部すぐ解釋出來るものではない。一つ二つなりと感動したものを受けることによつて、やがてその大いなる命をうけるのであつて、難解な書として捨ておけば、つひにその貴い寶を踏み荒して通ることになつてしまふ。

それと一寸似たやうな氣持で、私は萬葉集の歌を味はひ得るものは幸ひであつて、段段くりかへして讀んでゐる中にだんだん大きく分るやうになり、その貴い價値を感受するやうになるのだと思つて筆をとるのであります。

不可解な本を讀んでみるやうな動機は、極めて不思議なことによつて、或ひは簡單なことによつて、緣の絲に結ばれるのだといふことが出來るでせう。

私がそもそも萬葉集といふこの無盡藏な寶庫に入る一番始めは、たしか明治四十二年頃と思ひますが、その頃夢中で愛讀して居つた女子文壇といふ唯一の婦人文藝雜誌があつて、そこに與謝野晶子さんがいろいろの時代の歌を解釋してゐる中に、萬葉集の中から一首今にして思へばあの有名な額田王の

(20) 茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

の一首が評されてありましたが、私はその評を殆んど一つも記憶して居りません。ただわけはわからないが、この歌のもつ文字の美しさ、及びその調べのいかにもリズミカルな快さのなかに、何かわけはわからないが、心をうたれる深味があつ

て「まあ！」と叫んで驚嘆したほどの感動をうけ、こんなよい歌が書かれてある萬葉集といふ歌集を讀んでみたいものだとしきりに願ふやうになりました。

もとより萬葉集の名は歴史的に學校でも習ひましたけれど、その頃はとてもとても現代のやうに一般的には盛んでない頃故、山深い田舎の少女などには手に入れる術もなく、同時に現代のやうに行屆いたその手引書もなく、誠に思ふだけで手に入れがたいものでありました。

忘れもせぬその女子文壇といふ雜誌は、詩や歌や文章が募集してあつて、私や亡くなつた三宅やす子さんや神近市子さん、若山喜志子さん、生田花世さん等前後しての投書家で、そこで一等に入選するとお金が拾圓（その頃にしては大金）貰へるのですが、私は幾度もその拾圓を受けたことがありました。

それで或時、その編輯長である河井酔茗氏に手紙を出して、その時もやはり一等に當選して居つたので、お金はいらないから、もし出來たら萬葉集と源氏物語が欲しいのであるが、お金が不足な場合は萬葉集だけでも送つてはいただけまい

かといふ申込みをしたところが、一週間ばかりすると、私の家に向つて坂道を上つて來る郵便脚夫が、澁紙包みの大きな荷物を重さうにかついで來て「小包」と叫んで玄關にはふりこんで行つたのです。

私は何事かと思つて玄關に出てみると、その投げこまれた大きな包みは、私の名宛で送られたもので、東京の女子文壇社の判がおしてありました。

私ははつととりのぼせて了つた氣持で、いそいで包みをといてみますと、なかには帙入りの上下、二帙に分れた萬葉集と、二帙に分れた源氏物語であつて、萬葉集は橘千蔭の萬葉集略解であり（俯學院發兌）、源氏物語は湖月抄のそれでありました。

私は何か夢に夢みる心地で、まづ萬葉集の四冊に分れた一番上の一冊をとびつくやうにしてひらいてみましたが、驚きました。私もとりのぼせて居りましたことですが、帙入り本のこの略解をお讀みになつた方があれば御承知でせうが、全文が四號か三號位の萬葉假名で、その脇に平假名でその讀方を書いてあり、釋は

非常に簡單で餘程萬葉集に通じてからでなければ、初めて讀んだ私などにはまづ開いた一頁に一つも解るところのない驚きをいたしました。

私はかつて感激した「茜さす」の歌を探してみますと、その歌は第一卷の餘程始めの方に書かれてあり、その歌はすぐよめて非常に懷しいものに出會つたやうな喜びを味つて、幾度もよみかへしました。しかしその註釋はごく簡單で、その當時の私にはやはり何のことか解らないのですが、唯その歌は私の感動をゆすぶるのです。

それから私はこれはもう解らぬながらも無茶苦茶によめるだけ讀みとほしてみようと、第一卷の一番はじめ「籠毛與。」（現代は多く「籠毛與。」とよませる）から始まつて一向にわからない、全く砂地を行くやうな思ひで讀みすすんでゆきました。

或時には餘りの悲しさ、やるせなさ口惜しさに右手に持つて居つた鉛筆をいきなり頁の上にギリギリとさすやうにして泣きながら、それでもわからぬ先へと歩みをつづけて行きました。

この略解本は今も私の手許にあつて、時折に取り出してみる時、その鉛筆のあとのギリギリとついたところへゆくと、今でも私は涙ぐまされることです。

忘れもせぬ第四卷の少し始めの方にある歌ですが

(511) 吾背子は何處行くらむ奥つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ

この歌は第一卷にも書かれてある歌ですが、その時は全く解らなくてすごしてしまひましたが、第四卷にまた出て來たこの歌のところに來て、何か私の心をうつものがありました。

萬葉集の古い時代の人の歌のよみ方、いはばその調子や表現などに實に豐かなものが含まれて居り、深い心のまことから詠みいだされたものであるといふことが理窟でなしに自然にうすらうすらと光を放つて來るかの如く、私に「よい歌だな」といふうなづきが出來、敎へられるものが理窟や理論では言ひあらはせない

ところに潜み含まれてゐることを感受したのであります。

本當に私はうれしくてかつて苦勞してよんで來たところをもう一度くり返してみますと、わからぬながらにそのよさが段段に私を惹きつけてくるのでした。そしてたうとう上下二帙、二十卷の萬葉集をよみとほして了ひ、人麿の歌の雄偉なる太平洋の波の音にも似たやうな大交響樂的長歌の味にも感心したり、女性の聲の眞實に張り切つたソプラノに感動したりして、おひおひに歌の上に感動の○をつけることが出來るやうになつて來ました。

私が註釋書によつて或ひは先生について、萬葉集を勉强しはじめたのは後のことで、そもそも自分が萬葉集に近づいたのは、かういふ無茶な近づきやうをしたのですが、それ故にこそと言ひたい程少しづつ解つてゆく感動の深さ强さに忘れ難いものがあります。

私は今でも萬葉をお學びになる方に、成可くはじめは註釋書なしに直接に本文にふれて、わからなくても進んでみようとして御覽なさいといふ、一面からいへば、甚だ亂暴な申樣をいたしますが、いはばこれはよい場所は自動車などに乘つて通らずに、歩いてつぶさにみてごらんなさい、その味はまた格別ですといふ程の心がこもつてゐるもので、現代は萬葉集の研究が盛になり、解釋の本や鑑賞の大變によくわかるやうに書いた良い本が澤山に出版されて居りますから、現代の若い人人は大變に幸福だと思ふことです。

さて以上をもつて序として、私はこれからかういふ勉强の道を辿つて深く感動した歌について、順を追つて極めてわかりやすく書いてゆきたいと思ひます。特に短歌を選んで書いてゆかうと思ひます。すべて、歌の上に入れてある數字の番號は國歌大觀の萬葉集にある番號によるもので、岩波文庫の新訓萬葉集に打つてある番號と合はせて書き入れたものであります。勉强上此方が便利であらうと存じます。

(4) たまきはる宇智の大野に馬竝めて朝踏ますらむその草深野

歌の意は、

大和國の宇智の大野原に馬を並べて朝御踏み遊ばすことでございませう、その草深い大野を。

といふ意をあらはされ歌はれたものでありまして、舒明天皇が御獵に御出ましになる時に、中皇命が間人連老といふ人をして獻らしめたまうたお歌であります。

このお歌で私が非常に感動させられることは、廣大な宇智の大野原に馬を並べて……これには馬を駈けつてといふやうな意が、多分に含まれてゐるのでありませう。そしてその爽快な朝獵の有樣を想像して、結句に「草深野」と憧れをもつてその野を思ひやられた、新鮮なる清氣さわやかに限りない氣品を藏してうたひあげられたその高く雄大なる點にあるのであります。

私は以前、故平福百穗氏が金鈴社展覽會に「獵」と題して出品された繪に何かこのお歌を聯想させる深い趣のあるものを感じさせられました。繪は夏草がすでに深くなり茫茫と生茂り、朝露が數限りなく輝いてゐるなかに王子の如き若人が二人、一人は白馬に跨り、一人は栗毛の駒にまたがり、弓を引いて何か獲物をねらつてゐる、そこに殘月が白く落ちかかつてゐる名畫の前にしばらく立つて眺め入つたことでありました。

後に、平福氏の「竹窗小話」を拜見してゆくと、をはりにこのお歌を始め、萬葉集の獵の歌からヒントを得ておかきになつたものだといふことを知つて一層思ひ深く存じました。

第二講

本講では、私に因縁の深い例の

天皇、蒲生野に遊獵し給へる時、額田王の作れる歌

(20) 茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

の一首について、少しお話をしてみたいと思ひます。

萬葉についてのお話といへば、註釋にしろ、講義にしろ、鑑賞にしろ、私の書いたものでこの歌の出ないためしはありません。昨年出版した私の「女性短歌讀本」の諸家の御批評を見ると、

「萬葉集にもよい歌がいろいろあるだらうに、この一首が幾度も一冊の本の中

に繰返し讃へられ、研究されてゐるのは少しわづらはしい」

との評もあり、また、

「今井氏は好きな歌、氣に入つた歌となると、幾度でも幾度でもその歌について言はなければ氣が濟まぬといふやうなところがあるが、やはり歌よむ人はそれが當然のことと思ふ」

と評された人も居られました。私にしてはいい氣になるやうですけれど、後者の御批評の方が私の本心を言ひ當てて下さつてゐるので、それは前講の私と萬葉集の結びつきを讀み味はつて下された方にはよくお分り下さることと思ひます。

精しきにせよ簡單にせよ、私としてはこの歌を拔いてしまつて萬葉集といふものを語る氣にはなれないので美しくしてしかも大きく、雅にしてしかも深き眞實を以て一首を詠みあげてある、この一首はその着想といひ表現といひ、しかも歌に於て最も大切な格調の張りに滿ちて、高くよむ者を引上げてゆく……この一首をぬかして、他の良い歌だけを語る心持になれないほど、私はこのお歌を尊誦し

てゐますので、つい何時もこの歌が出るわけでありますが、極く簡單にお話してみませう。

はじめに天皇とあるのは、天智天皇でありまして、詞書にあるとほり蒲生野に御獵をなされた時に、額田王がお作りになつた歌であります。

額田王は天智天皇の後宮に入つて奉仕せられて居りましたが、まだ後宮に入らぬ以前、大變お仲のむつまじかつた大海皇子が女王の方をご覽になつて、袖を振つて親しみをおみせになつたのに對して、禁裏に入つた御自分の立場から、同じ御獵のお供をしてゐる諸臣の思惑をも考へて、やさしく大海皇子をおたしなめになつた。實に言語に絶し、複雜した感情をもつてかく美しく優しく、しかも眞情を以て急迫した心の調子を直ちにうたはれた一首であります。

この「茜さす」から「標野行き」までは、一面からいふと、貴き御方にお側近く仕へる自分の謹嚴なお身の上になぞらへて詠まれたものと思ひます。その時代「紫」の染色は高貴の方のお用ひになるもので、そのためには紫草を栽培して、

その根からとつた紫を染料としたので、そこは禁園として人人の近づけないところとなつて居りました。

「標野」といふのも高貴の御料地として近づきがたい園をさすので、さういふ御位地にたつた御自分をこの美しい文字によつて喩へをなし、また、大海皇子様が以前むつまじくした女王の邊りを去りがたく、かゆきかくゆきして、御自分の心持を表はしておいでになるのをも深く忝けなく感じて「紫野行き」「標野行き」と疊みかけてそのお心を如實に歌はれたのであります。この邊の心持は到底歌でなければ表現出來ない巧まずして巧みな音調をなして居るのであります。

大海皇子は昔の心をもつて、無邪氣に大膽に、袖を振つてまでも、御自分をおしめし下さるが、なみゐるお供の人人が、萬一あらぬお噂でも申上げることがあつては困ることですといふ、さういふ心を實に傑れた歌にして卽座に詠みなされたものでありまして、これをもつてみましても額田王といふ方が、いかに才高く、且つは眞心の深い方であつたかといふことがわかります。私は幾度でも幾度でも、

この歌に對する感動を書いて書いてかきぬいてみたいつもりで居ります。

(48) 東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月西渡きぬ

柿本朝臣人麿

この歌は、輕皇子と申上げた後の文武天皇が、今の大和の宇陀郡の安騎野といふ野に獵においでになつて、その野にお泊りになつた時、お供申上げた多くの人の中で、柿本人麿が作つた歌であります。

すべて古代の獵にしろ旅にしろ今日の心をもつておしはかることは出來がたいのです。宿屋といふものが殆んどなく、高貴の御身をもつてしても、臣達が俄かに刈り集めた柴や薄をもつて假のお宿をお作り申上げた程度のもので、まして臣達は草をおしなべ、薄をおしふせた草の褥をもつて宿りとしたものでありまして「草枕、旅」といふ言葉の出來たのも、決して偶然ではなかつたこともおわかりになりませう。

人麿もやはり草に臥し、曉に目醒めてみると、その見渡す限り廣い安騎野の東にかぎろひのたつのが見えてきらきらしく盛なる氣運がそこに動き、今太陽が昇らうとしてゐる壯觀を呈して居ります。ふりかへつて西の方をみればそこにすでに光を失つた殘月が白白と傾きおちてゆく……その大空の對照、小さい心では受けきれないほどの大自然の曉の野の風景にうたれて、かく渾然と一首をよみあげたのが人麿でありました。後世の與謝蕪村が、

菜の花や月は東に日は西に

といふ名句を殘して居りますが、景色は反對でありましても、蕪村はきつと人麿のこの歌に敎へられること多かつたと思ひます。

大寶元年辛丑秋九月、太上天皇紀伊國に幸せる時の歌

(54) 巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思ふな巨勢の春野を

坂門人足

この歌は、大寶元年秋の九月に、お位を文武天皇におゆづりになつた後の持統天皇が紀伊國へ幸された時に、お供の列に加つた坂門人足が、巨勢山にはえてゐる澤山の椿の木の厚い葉が、てらてらと秋の日に光る美觀に深く打たれて詠んだ歌で、こんなに今美しい椿の木が春になつて花をつけたならば、まあどんなに美しからうと思ひやつて詠んでゐる一首であります。ですから、ここの「思ふな」の「な」は「なかれ」と打消しの「な」ではなくして、たとへば「思ふよ」といふやうな感動をこめた言葉になります。

この歌は非常におもしろく調子をとつて詠まれてあるところが傑れてゐるので、すべて歌には調子といふものが大きい效果をしめして居ります。

「つらつら椿つらつらに」といふやうな詠み方には、例へば何かおもしろいダンスのステップをさへも聯想させるほど、心が興にのつてゐるおもしろさがあります。それも、ほどほどのもので、後世の花柳界などに流れこんだ唄などになつてくると、ずゐ分下品なものもありますから、そこは注意しなければなりません。

人足の歌がずゐ分興にのつて居りながら、何處か素朴で眞實味のある、さういふところが萬葉歌の大いなる特長をあらはしてゐると思ひます。

有名な僧良寛に

山笹に霰たばしる音はさらさらさらさらさらさらとせし心こそよけれ

といふ歌がありますが、萬葉集をまなんだ人の歌としてはづかしからぬものと思ひます。

第一卷はまだまだ申したいのですが、これだけにして第二卷の歌にうつりませう。

第二卷には特にはじめから傑作がならべられてゐて、いづれからと採るに迷ふほどでありますが、それはまた後の機會にゆづるとして、ここには純情玉の如く、肉身の御弟を思はれ、その薨じ給ひし時、その姉君として哀傷おくあたはず、お

歌をなさつた大來皇女のお歌を一首申上げませう。

(166) 磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在りといはなくに

大來皇女は伊勢の齋宮として貴い御位にあらせられましたが、母君を同じうする御弟の大津皇子が薨じ給ひしときかれて「みまく欲り吾がする君もあらなくに奈何か來けむ馬疲るるに」とお歌にもあるやうに、馬の歩みさへもおそい心地して、大和國へお歸りになつてみれば、はや大津皇子は葛城の二上山に葬り奉つてありました。餘りの悲しさに大來皇女がその邊りの清き流れの邊りに咲き盛つてゐる馬酔木の花をご覽になつて、昔御弟君に美しいと思ふ花を手折つてあげたり、草を摘んで共に遊ばれた頃を思ひ出され、悲しみにたへずしてお詠みだしになつた歌でありまして「磯の上に」といふのは「磯のあたりに」といふことでありまして、その邊りにはえてゐる馬酔木の花を手折りもしようけれど……「これこんなに綺麗な馬酔木が咲いてゐました」といつて、お見せして共に喜ぶ弟君は、もう世にゐらせられないのだ、と深くも嘆かれたお歌であります。

このお歌は一見、心稚く單純のやうに見えますが、お心は深く御弟の上を思ひ、悲しみたへがたくなつてゐるお歌であることがわかります。すべて言葉多きはかへつて眞情を濁らすもので、純粹に人を思へば、ひたすらにその思ふ心を表はすので充分であり、その純粹さが人の眞心をうつのであります。かうした純粹な味ある歌は萬葉集をおいて他にはなかなか見當らないのでありまして、純情玉の如し、といふ言葉は、この歌の御作者などにこそ當はまる言葉であると、つくづくと味はせられた次第であります。

第三講

私としては、萬葉集中でも特に第一卷から第四卷までを、非常に愛讀いたしますので、お話をしたい歌が澤山ありまして、殆んど選出に困難いたします。

然しこの讀本の目的はそれとはすこし違つて、只只むづかしいと思ひこんでゐて、この寶物に手もふれないでゐる人人の間に、どうにかして、その片鱗をでも說いてみてこの驚嘆すべき古典の前に心からなる愛敬を持つやうに、わかりよくお話をするのが、第一の目的ゆゑ、歌として「より深く」より高きものがあつても、時にその歌をぬかしてわかりやすい歌の方を說く場合も出來て來ます。そして二十卷に渡つてのお話ゆゑ、實に惜しい名歌をぬいてゆくことも止むなきことと御承知下さい。

幸にこの歌話によつて萬葉の歌に親しみを持たれる方がありましたらば、進んで萬葉集の研究をなされ、言語に絕したその至寶を味はれたい願ひであります。

三方沙彌、園臣生羽の女に娶ひて、未だ幾時も經ず、病に臥して作れる歌

(123) たけばぬれたかねば長き妹が髮この頃見ぬに搔入れつら　三方沙彌

(124) 人はみな今は長しとたけと言へど君が見し髮みだれたり　娘子

作者の三方沙彌といふ人も、園臣生羽の娘子も傳記が不明でありますが、兎に角、三方沙彌といふ男が園臣生羽の娘と結婚して日もたたないのに三方沙彌が病氣になつて床につきました。その時三方沙彌が病床から娘子の處へ言ひ送つた歌でありまして、その意味は、

束ねれば卽ち頭の上に束ねて結び上ると、ぬるぬると靡き落ちてくる可憐さ、

又束ねないと、もう少女時代をすぎた髪が長く靡くやうになつた。どちらにしても、美しいその髪をこの頃見ないこと久しい氣がします。もう結び上げたでせうか。

いかにも病める人が床のなかで戀ひわびてゐる妻に贈つた愛着の深い歌です。その戀を髪に托して言つてゐるところ、技巧的のやうで、實は更に愛着の心を深く表現してゐます。

この歌をよんでみますと、この娘子はまだきはめて年が若く、現代でいふとお下げ髪にして通つてゐた女學校卒業の直後位の年輩の娘子でもありましたでせうか、そしてその髪は猫毛でなくてややこはい髪の娘子であつたことがわかります。この時代の結婚は、必ず女が夫の家に入るものとは限つて居りませんでした。

さてこの贈られた歌に對して、娘子の返した歌は直ちにその髪を受けて、

貴方のおつしやる私の髪はしばらくお逢ひせぬ間に丈がのびて見る人は皆、もう長いから髪を結うたがよいと申しますけれど、貴方が御覽になつて愛撫して下さつたことを思ひますと、いかにのび亂れましても私はこのままでおきたいのです。再びこのままでお目にかかるまでは、結ひ上げる氣持にはならないのです。

といふやうな、きはめて可憐に餘情深く歌はれた歌で、そこを味ふべきであります。

但馬皇女薨じ給ひし後、穗積皇子、冬の日雪落るに、遥に御墓を望み、悲傷流涕して御作歌一首

(203) 零る雪はあはにな降りそ吉隱の猪養の岡の寒からまくに

穗積皇子は　天武天皇の皇子であり、但馬皇女も同じく　天武天皇の皇女であります。お二人は非常に御仲むつまじくおはしましたのですが御不幸にも皇女はやはやく薨じられました、和銅元年六月としるされてあります。

穗積皇子のこのお歌は冬の歌ですから、多分その年の冬のお歌でありませう。

皇子の宮からその御墓のある猪養の岡が見渡されたのでせう。歌の意は、

今降つてゐる雪よ、その雪は澤山に降つてはいけない、降らないでくれ、吉隱の猪養の岡が寒からうから。

といふのでありまして、吉隱といふのは、今日の大和の初瀬町の中にあります。猪養の岡といふのはその所にあつた岡の名でせうが、今は傳はつてゐません。

このお歌を一度讀む者は、言ひやうもない深い愛情の眞に打たれることでせう。例にとるのは長多いことですが、私の知人が若く世を去つた弟を葬る時にどうしてもすぐ土に埋めるのは寒さうで可哀さうでならなくて、骨壺のまはりに厚く綿を卷いて葬つた話をききました。眞の愛情といふものはそこまで深く人をつれてゆきます。

皇子は皇女を葬つた岡にドシドシと雪の積つてゆくのを目のあたり見て、自分の御身にひたに雪が積りゆくやうな寒さを感じ、皇女の上を偲び、その御墓を身をもつて溫めてやりたい程の心地に打たれて、お詠みになつたのです。そのお心の眞情が一首の上に溢れるやうに感ぜられてまゐります。このお歌には、後の世の美辭を並べた綾のやうなものはありません。何と本心から湧き出でた御詠でせう。萬葉の歌の特色は、かかる處に大きく輝いてをります。

天皇、志斐嫗に賜へる御歌一首

(236) 不聽といへど强ふる志斐のが强語このころ聞かずて朕戀ひにけり

これから第三卷にうつります。ただ　天皇とのみ書かれてありますが、これは持統天皇の御歌であると一般に今は知られてをります。天皇が或る日の御つれづれに、この頃しばらく見えない語部の志斐といふ老婆に、卽興的におからかひになるやうな御氣持で、御歌を御送りになつたのであります。御歌の意は

もう聞き飽きた、きくのはいやだと言ふのに、無理にまあおききなされませ、

と强ひ語りをする志斐のがその强ひ語りも、この頃しばらく聞かないので、

朕はききたうなつた、戀しくなつた。

といふ、きはめて仲のよい御戯れをおつしやつておやりになつたのです。この一首のうちで「志斐の」といふのは、志斐に付け加へた助辭でありまして、親愛の氣持をあらはしてゐるのです。

これに對して語部の志斐はお返歌を上げてをります。

(237) いなといへど語れ語れと詔らせこそ志斐いは奏せ强話と言る

もう申上ますまい、いやで御座いますと申上げますのに、もつと語れもつと語れと仰せになればこそ志斐は申し上げるので御座います。それを强ひ語りとは……

「おひどうございます」といふ程の意をこめて、やはり卽興的に御返歌を差上たのでありまして、誠に折目を正しくしながらも、心からなる親愛の情があふれ

た歌であります。

この贈答歌は、一讀、何人をも思はず溫い微笑をおこさせる程のものがあり、これこそ我國古來からの、君臣の情あたかも親子のやうな固く深い結ばれをもつその一端を、如實に見せてゐるやうにさへ感じさせられます。

この一首のなかにも「志斐い」といふ言葉がありますが、これは前の志斐のに對して、必ずといふ譯ではないのですがどこか打てば響くが如き調べを合せて居りますので、「い」は助辭で體言につくのであります。

(255) 天ざかる夷の長道ゆ戀ひ來れば明石の門より大和島見ゆ

この作は、前に述べました柿本人麿の歌でありまして、殆んど人口に膾炙されてゐる作でありますから、すでに御承知の方も多いことと思ひます。

人麿といふ人は、全く我國の生んだ前後に類なき大歌人でありまして私どもはこの人を歌聖としてあがめ思ふ次第でありますが、天然に雄偉高邁なる性格に住

し、しかも素にして微妙なる感受性を藏したる、殆んどその前にただ敬親感動する
る他はない歌人であります。

この一首は、人麿が地方小官吏として筑紫の國に暫く在住し、やがて大和に歸り來れる時に、その旅路の船に於てか詠まれた歌なのでせう。意は、

天ざかると言ふのは、中心卽ち朝廷のある地から遠くはなれてゐることを言つたので、自然、地方のことになります。その地方の長い路を幾日も日を重ねて大和、卽ち中心地、そこには自分の家もある、さうした地を戀ひなつかしみつつ來れば明石海峽からあのなつかしい大和島が見える。

と詠嘆したのでありまして、歸心矢の如き心が實に雄大に、しかも率直に歌はれてをります。この歌はよくよんでみると日本人の心情を代表してゐるやうな感さへも起り、これを千有餘年以前の人の感情として受けるのでなく、現代に生きてゐる自分たちの內に深く流れをなした聲であることが思はれます。

私の弟が日本郵船會社にをり、曾て歐洲航路の乘組員であつた時しみじみと申

したことに、自分は歌人ではなく、歌も多くは知らないけれど、歐洲航路の長い長い旅路を來て、船がいよいよ明石海峽あたりに近づいてくると、船の人人の心には期せずしてこの歌が思ひやられ、船長もともになつて我倭島の美と鄕土愛につつまれてしまふ。「明石の門より大和島見ゆ」あの感慨は實に全日本人の感慨であらうと言つたことがあります。私は船路の旅をさう深く知りませんが、この弟の言葉にいたく打たれたことがあります。

武田祐吉博士は人麿の歌を語られる時に國民を代表するかの歌の多いことを語られましたが、私はこれにも深く頷かされました。なほ人麿の歌として、

(304) 大王の遠の朝廷と在り通ふ島門を見れば神代し念ほゆ

といふ一首がありますが、前の歌ほど一般的ではありませんが、非常に嚴肅に瀨戸內海の風景を歌ひあげられたもので、私は敬誦おくあたはぬものがあります。

遠のみかどといふのは筑紫の太宰府のこと。

第四講

(318) 田兒の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪は零
りける　　山邊赤人

この一首は非常に有名でありまして、大方の世の人人は百人一首の歌で諳記しておいでのことと思ひます。然し百人一首の歌は、誰が手を入れたものか「田兒の浦にうち出でて見れば白妙の不盡の高嶺に雪はふりつつ」となつてゐまして、それが一般に傳はつてゐることは悲しむべきことです。

これは本格的に歌の味ひ方が了解出來てくると、全く段ちがひにこの萬葉集の作の方が優れてゐるのでありまして、百人一首にある方は、新古今集冬の部のなかに、題しらずとして載せられてありますが、その時代は和歌が非常に隆盛になつた時代ですから、誰か手を入れて、新古今風の歌調にかへてしまつたのでせう。調はなめらかに、いかにも流麗に歌つてありますが、大切な内にこもる精神力が薄いのです。

原作の方は何といふ壯大な景色を、たくまず飾らず率直に、讀んだだけで晴れ晴れとするやうによみ上げられてゐることか、歌がわかるやうになつてきますと、よく解つてまゐります。

「田兒の浦ゆ」といふのは、駿河の田兒の浦からといふのでありまして、この「ゆ」は實によくきいてゐて、この歌をしつかりと落着かしてゐます。現代の少女方は「ゆ」といふ詞をやたらに歌に用ひますが、それがちつともきいてゐないので、私は幾度となく、御注意をいたします。「ゆ」は一定の場所からそこを通して、即ちどこそこより、といふやうな氣持でよまれるのがよいので、この歌も田兒の浦からずつと沖の方へこぎ出してといふ氣持をふくめてゐます。

齋藤茂吉氏の新選秀歌百首といふ書物には、浦ゆは、浦からといふ意味だが、さういふ意味のことは心に籠めて「ゆ」はそのまま「ゆ」として味ふ習練をせねばならぬ。古語の鑑賞はすべてさうで、現代語の飜譯が前景に立つと邪魔をしていい正しい鑑賞は出來ないと言はれてありますが、私は絶對賛成であります。然しただ正しくない亂雜な用法は困ります。田兒の浦からこぎ出してみると眞白に不盡の高嶺には雪が降つてゐる、とよんだのですが、身にしみきれない程の味があります。そこをよく受取らねばなりません。この味は理窟では言ひ解けない深さがあります。

(333) 淺茅原つばらつばらにもの思へば故りにし郷し思ほゆるかも

大伴旅人卿

大伴旅人卿といへば、名家大伴氏の當主で祖先は天の忍日の命の子孫であります。旅人卿は神龜五年頃に太宰の帥となつて九州に下つてをりますから、この歌

はその任中に出來た歌でありませう。

一體その頃は大和をはなれて地方官として出る事を、いかに重大に悲しく思つたかわかりません。今日の如く汽車汽船の便もなく、電信、電話、飛行機といつた交通に便利な世と全く異つてゐますから、その心は現代の人人には察しきれないものがありました。それを考へて味はねばなりません。

卿が或る時しみじみと我が故郷、むしろ私は大和をなつかしんだ歌ではないかと受取ります。淺茅原といふのは茅がやがまばらに生えた原を言ふのでありまして、この歌の場合は、つばらを引出してくる音調の上からの枕詞であります。つばらはつまびらか、くはしく、細細といふことになります。細細ともものを思へば、故郷のことがしみじみと思はれるなあと詠歎したのでありまして、音調の上にもなつかしい感情があふれてゐます。

あんまり理窟を言はないで心の感動を率直に歌つてあるのがとてもよろしいので、すべて歌の音調は非常に大切なものですが、この歌の場合のやうに、しんみ

りと内容と結び合つてゐないと、音調ばかりよくしようとすると淺はかな歌が出來てしまひます。その邊が大切なところでせう。この旅人卿の子が、有名な家持であり、妹は萬葉集中の女流歌人として知らぬ人もないあの大伴坂上郎女であります。

湯原王、芳野にて作れる歌一首

(375) 吉野なる夏實の河の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

一讀深山の風景を思はしめ、全身粟だつばかり森と魂の底までも靜まり渡るかの感に打たれます。

御作者湯原王のことは、確定的には申されませんが志貴皇子の王子と申されて居ります。志貴皇子は　天智天皇の皇子でありまして、非常に優れた御歌を萬葉集に殘されて居られます。御代代いやつぎつぎに高く限りなき歌才に惠まれ給ふ尊さ有難さを思はぬわけにはまゐりません。

さてこの御歌ははじめに申したやうに、自然鑑賞の御歌であることは勿論でありますが、その一面に、深く澄み渡つた王の御性格をはつきりと反映した御歌であります。吉野は山深く水清き勝地とて、そこに離宮があり、代代の天皇はいく度となく行幸なされて居られるのです。自然、皇子や王子が行幸に隨行されたことと存じますが、湯原王がどういふ時この御歌を御作りになつたかは不明です。

御歌に出てくる夏實の河といふのは、瀧と呼ばれてゐる吉野川の激流が瀧をなしてゐる（そこに離宮が造られて在るのです）ところから上流數丁のところをさすのでありまして、同じ吉野川でも菜摘川と名のある場所で、川幅が廣く彎曲し、そこが眞蒼な淵をなしてゐる幽邃限りなきところです。かかる深山の陰をなす青淵は思ふだに靜寂の極でありまして、その靜寂を破つて鴨が一種哀調をおびた聲を餘韻長くのこして鳴いてゐる。その風景を目をつぶつて考へてごらんなさい。浮世に名利を爭つて生きあへぎゐる人間の姿はまたなく淺はかにあはれに思はれませう。

王は御性格としてさうした境地を御好みになつたのでせう。實に全身的に出來た優れた御歌であります。私の先生島木赤彦氏はこの御歌を評して、

「深山と水と水鳥と合して寂寥の一如に歸し、一如に歸してゐる中に水と鴨とがうごいてゐる。萬葉集中の秀逸である。『山かげにして』の結句が如何によく全體に響きを反してゐるかを想ふべきである。この反響宛らにして名鐘の餘韻である。」

と申されてありますが、凡そ名批評と申すべきでせう。

ついでに申しますが、萬葉集といへば第一に古代の素朴味を言ひ、土くさい、線の太いところが特色と思ひこんでゐる人が多いのです。勿論さうした特色も大切な萬葉集の持味です。然し藝術味にいたつては、後の古今集や新古今集の流麗なるに及ばぬやうに言ふ人があります。成る程さうした人工的の美しさ、薄物の美は、萬葉集には求められません。然し眞にすぐれた藝術は高くまた深く限りなき至上至深の境地に觸れ得てゐないと滿足出來ません。かかる歌を味ひ得ましたらば、やはり萬葉に及ぶ藝術境に入り得た歌集はなかなか求め得られぬことを悟るだらうと存じます。

たくまずして大自然の呼吸と呼吸を合せて歌ひ得てゐる萬葉集の前に、私は心から頭をさげて禮讃するものであります。

十六年甲申春二月、安積皇子の薨じ給ひし時、內舍人大伴宿禰家持の作れる歌

(477) あしひきの山さへ光り咲く花の散りぬる如き吾王かも

十六年とありますのは、天平十六年のことです。安積皇子は　聖武天皇の皇子であらせられます。およそ美美しく人望あつき皇子樣であつたのでせう。また大伴家持ははじめ內舍人（專ら宮中にあつて至尊の側近に奉仕警衛し奉るを任とする官）となつて天平十年頃からおつかへしてをつたらしいのです。そして安積皇子とは特にお親しみ申してゐたらしいと書かれてあります。

この歌は皇子が天平十六年、御齡十七歲の御靑年盛に薨じ給ひしを惜しみ悲し

んで作られたもので、家持自身は二十七歳でありました。歌の意は、

あしひきは山の枕詞として古くから用ひられてゐます。山さへと力を入れて、

匂ふばかり、照りかがやくばかりに咲く花の、その輝かしい花が散つた後の

やうに逝きませしわが皇子様よ！

といふのでありまして、上句の譬喩がいかにも若き皇子を偲ばしめ、その皇子の御薨去を山が照るばかり咲いてゐた花が散つてしまつたと言つて言はんやうなき寂しく空虛な、のこされたものの心を言ひ、世の寂寥を説明せずに心底まで感じさせるのであります。そして結句をごたごたさせずに吾王かもと、力をこめて言葉すくなく止めたところ、大へんに立派だと思ひます。

これは家持としては若い時代の作ですけれど、悼む心が眞に強かつた爲にその作をかくも緊張せしめてゐることを思はずにはゐられません。家持は澤山に萬葉集に歌をのこしてをりますが、なかにはあまり感心出來ない作もあります。然しこの歌は確に優れた作と思ひます。

額田王、近江天皇を思ひて作れる歌

(488) 君待つと吾が戀ひ居ればわが屋戸の簾うごかし秋の風吹く

さきにお話しました額田王が近江天皇卽ち天智天皇を待ち奉つてゐる心を歌つた歌であります。この御歌を讀んでゐると、私は自然に女性の微細なる直覺といふことを思はせられます。歌の意は、

君のおいでをお待ち申して私が戀ひ渡つて居りますと、この屋戸の簾を動かして秋の風が吹きます。（それが何か君のおいでになる暗示のやうな心地がされてなりません。）

といふやうな戀ひわびてゐてしかもつつましい心を歌つたのでありまして、秋風などといふと現代では捨てられた戀などに通つて考へられますが、この時代には總て自然で決してそんなやうに心をゆがませたものではありません。昔衣通郎姫が　天皇のおいでを待ち奉つて

わが背子がくべき宵なりささがねのくものおこなひ今宵し
るしも

とよまれた、日本書紀允恭天皇八年の條にある歌を聯想され、何か神祕な女性の直感を思はされます。

第五講

安倍女郎の歌二首

(505) 今更に何をか念はむうち靡きこころは君に縁りにしものを
(506) 吾背子は物な念ほし事しあらば火にも水にも吾無けなくに

作者安倍女郎といふ婦人は傳未詳の人でありますが、時代は藤原京（持統、文武兩帝の時代）の頃の人であつたらしいと申されてもをります。お歌のこころは、

今更に何をこせこせと物念ひなどしませうぞ、自分の心はひたむきに貴方にお任せしきつてをりますものを。

と、燃ゆるばかりの心を率直に夫に向つて、また世の中に向つて吐露したもので

ありまして、次の歌と相俟つて、およそ女そのものの心情を全身的にうたひあげた歌であります。

この一首、初句からして力ある句を用ひ、「何をか念はむ」と、ひた押しに押して、ここでちよつと句を切りますが、それは次ぎの句の烈しさを瞬間おさへて更に力強く歌ふ自然の一息であります。それから頼みきつてゐる自分の心さながらの表現に枕詞のやうにして「うち靡き」といふ句が加へられてゐますが、烈しいなかに何たる優し味のある句でせう。風に吹かれ靡く草木は一方に向つてすべてが靡くのです。

そのやうに自分の心も君に向つてのみ靡くこころをふくめて歌つたのでありまして、巻の二にある但馬皇女のお歌に「秋の田の穂向のよれる片縁りに君により なな言痛かりとも」と、ありますが、何か似通つた心の聲があり、自然であつて女性の心底をよく言ひ現し得てゐる歌と、私は愛誦いたしてをります。結句の、「縁りにしものを」は大磐石の力あり、ぴたりとすわつて動かないところをよく

味はふべきであります。

はじめの歌も優れた歌ですが、第二首目の歌はあまりに有名な歌で、古來萬葉集中でも白熱的女性が絶唱の歌として知らぬ人はないと思ひます。

我が背の君は物をお案じなさいますな、何事かある折にはたとへ火の中へでも水の中へでも私がないのではない……卽ち私がありますものを。

といふ意を歌つたのでありまして、眞心の表現が内容と調子とを渾然とさせ、高く深き極地を突いてをります。「火にも水にも」は火の中へも水の中へもであつて、ちよつと誇張のやうに考へるむきもありませうが、眞實純一に夫を思ふ女心のほんたうの極地は、やはりこれだと私は考へます。

誇張どころか、あらはすべき心をかく言つてこそ、あらはし得てゐると思ふばかりであります。萬葉集以後、特に現代ともなれば世の中が複雜になつて、いろいろ夫婦生活の上にも直線でないものが生じ、その點で苦しみ歎く多くの人があります。

そして心なり生活なりが自然多岐にわたつてさまざまな形をとるので、淺はかに見えますが、事實我が背の君とともに敵の火のなかに入り、また武運を祈るためには暴れ狂ふ海にも身を投げて惜しまれなかつた弟橘姫の物語は、ただに昔話にのこるだけの物語なのでせうか。

否否、女の心の眞實の願ひを心に聞き深く追究してゆきますと、これは昔の話ではない、女と生れてその人のために身を捧げ得る賴もしい夫を持つこそ、女の生涯の幸福でありませう。身を捧げて仕へる夫を持つた女性はあやかりものである、とさへ考へられるほど、女は尊敬愛慕する夫を求めてやまぬのではないでせうか、現下の狀態はすべて止むを得ぬといふところのもので、女は純一を好むのであると私は考へます。

勿論、現代の若い女性がたにはそんなに眞正面をきつて結婚するのでないといふ人があるかもしれません。しかし結婚して心が深く夫に結ばれてゆく時、どんなモダンな女性でもその眞の女心はやはり夫とともに火にも水にもといふ眞心が必ず燃え上つてくることとおもひます。それは日常必ずそれを自覺してゐるといふよりも日頃は爭つたり憎まれ口をきいたり不和と思つたりすることがあつても、一旦非常時に際して湧きあがつて來る女心の極地は、やはりこれであると私は信じてをります。

現下の非常時に、日頃必ずしも仲がよいと思つてゐたわけでもない方でも、水ごりをとつたり神まゐりをしたりして心は夫と同じに火に水に入つて、心で夫の苦を分けてゐる多くの婦人の自覺があつたのだらうと思ひます。

(521) 庭に立ち麻を刈り干し布曝ぶあづまをとめを忘れ給ふな

この歌は地方のをとめの素朴さと可憐さをもつて歌はれた誠に氣持のよい歌です。

これは藤原宇合大夫と呼ばれた人が養老三年に常陸按察使となつてその地にをり六年を經て、任はて京に歸られる時、しばらく相親しんでゐたをとめが宇

合に贈つた歌でありまして、

庭に立つて麻を刈つたり干したりしながらしきりに遠くおしのび申します、
甲斐ない東をとめをお忘れ下さるな。

といふのでありまして、「麻を刈り干し」までは田舎をとめの日常生活をかりて來てつつましく身をはぢて申してをります。刈り干しと言つて音便をすぐ活用して「しきしぬぶ」卽ち、しきりにしぬぶとつづけたところ、なかなかの詠み手で隅にはおけません。

それから「東をとめを」と身をつつましく言つて「忘れ給ふな」と心を歌つた。地方色はありながら、都の詠みてに劣らぬ立派な歌となつてをります。一方に都の美美しいなかに歸つてゆく相手を恐れつつ見ばえなきわが身を寂しくかへりみて「忘れ給ふな」と純情を以て願つてゐる、可憐きはまりなき歌と思ひます。

この一首いろいろ讀み方がわかれまして、新訓萬葉集は「庭に立つ麻を刈り干し布曝す東女を忘れ給ふな」と讀ませてあり、「布曝す」は昔の元暦校本によ

るとことわつてあります。しかし私は自分の一ばん好む讀み方、萬葉集を習ひはじめた頃の讀み方に從ひました。

(594) 吾が屋戸の夕陰草の白露の消ぬがにもとな思ほゆるかも

右の一首は萬葉集の女流歌人として名高い笠女郎の歌であります。これは有名な婦人ですが、傳未詳でどういふ人の娘で何をしてゐた人かも不明です。

笠といふのだから笠金村の娘ではないかなどと考へる人もありますが、實證を立て得ません。しかしこの婦人は萬葉末期に生存し、名家大伴家のその時代の主たる家持に對して切なる戀をしてゐた婦人で、その戀歌二十九首が萬葉集のなかに（主に第四卷）のこされてあります。

このあげた一首もやはり家持を思つて詠んだものであります。

私の宿の夕かげが深くなつた草にかすかに結んでゐる露の……と、目前の風景を敍し、あたかもその露の如く私自身も消えるばかりに、すべもなく（は

かなく）思はれることです。

と、深く歎息をもらして戀に歎く歌です。これをよくよく味はつてみますと、萬葉集のなかでも初期、また中期の人たちの戀歌のやうに率直に、線太く高く詠みあげたものと異る、自ら時代の移りがあり、優雅にして後のほそりに通ふ味が出てゐます。

庭前に夕かげ深くなりし草をながめて、その結べる白露のはかなさを感ずるものは、もはやよほど文化が進んで纖細美に向つて自ら進み入る前途を暗示してゐるかの如く思はれます。しかし萬葉はさすがに萬葉で美と纖細の味のなかにやはり長歎息してゐる戀に眞實があり、社交的でありません。私はこの歌を愛誦してをります。

ところで同じ作者が同じく家持に贈つたもので、

(603) 相念はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額づく如し

同じ人とも思はれぬまでに、太く大膽に一氣に詠みあげられてありますところ、さすがに萬葉時代の歌であり女性であるとうれしくなつてしまひます。

こちらも念ひ同じやうにそちらでも念ふといふやうでない、相念はぬ人をこちらばかりでありがたがつて念ふのは、大きい寺の本堂の隅にある餓鬼のうしろに廻つておじぎをしてゐるやうなものですわ（ああばからしい）。

と氣焔をあげてゐるので、男に戀をしてもいたづらに引きまはされてはゐないその頃の女性の氣焔が、大膽に歌はれてゐて愉快です。

この一首をあるひは片戀の女の歌としてゐますが、私は赤彦先生のおつしやつた「斯る訴へをするところに家持に狎れ親しんでゐる心安さもある」と評されたのに賛成してゐます。

(651) ひさかたの天の露霜置きにけり宅なる人も待ち戀ひぬらむ

これはさきにもちよつと申したと思ひますが、萬葉集中、女流歌人で一番澤山

の歌をのこした大伴坂上郎女のよんだ歌でありますが、名家大伴家に旅人卿を兄とし、家持を甥にもち、しかも自分の娘をその家持の妻として遊蕩家としてきこえた家持をずつと圓滿な家庭の主となさしめたときく、才色兼備の婦人であつたやうです。

この歌ははつきりいつ詠まれたのかわかりませんが、兄旅人卿が九州太宰府に太宰帥としてをられたとき、卿の妻の大伴郎女が世を去つたので、まだ年少だつた家持の世話を見たりするために、二人の娘を奈良に殘してしばらく太宰府の兄君の家に行つてゐた時があり、その時の作であらうといふ說が私には贊成されます。

「久方の天」は露霜にかかります。露霜とは露が寒さに向つて霜になりはじめたものを言ふので氣候は十一月頃と察しられます。第三句で「置きにけり」と切つて心深き感慨をのべ、家なる娘たちもさぞ私の歸りを待ちかねてゐるだらう。

と、しんみりと京を思ひやる歌でせう。心の置き方はもとより、句の切り方、起し方、止めかたなどに、自然に敎へられ、感に打たれるものがあります。

以上は皆第四卷のお歌です。

第六講

今度は、第五卷の歌についてお話し致しませう。この第五卷は萬葉集のなかでも特に特色のはつきりした卷で、一卷が殆んど大伴旅人と山上憶良の作で、他はすこしばかり旅人の周圍の人の作がをさめられてあるだけです。

そのなかでも山上憶良は今で言へば洋行歸りの新人ともいふべき人で、その頃唐と呼ばれてゐた、支那の都で學問をして、文學的にも思想的にも種種な新智識を備へた紳士として衆人に注目されてゐた人でありましたし、誠に憶良にはさうした新智識が豐富にありました。

然し憶良その人をただ洋行否唐に學んだ新しい人とばかり考へては間違ひです。その根本をなすものは矢張り日本の、日本國土が生んだまがひなき純粹な日本精

神をかたく持つてをつたので、しかもどこかその人柄に純眞朴訥な良さを多分に持つた實に善良な人であつたことがわかります。憶良の歌には特色のある長歌がありますから、それを二種とりいれてお話いたします。それが憶良の新智識であつたのです。

子等を思ふ歌一首竝に序

釋迦如來、金口に正しく說き給はく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅の如しと。又說き給はく、愛は子に過ぎたるは無しと。至極の大聖すら尙子を愛しむ心あり。況して世間の蒼生、誰か子を愛しまざらめや。

(802)
瓜食めば　子等思ほゆ　栗食めば況してしぬばゆ　何處より　來りしものぞ
眼交に　もとなかかりて　安寢し爲さぬ

瓜を食べると子供等のことが思はれる、栗を食べるといよいよ子等のことが思ひ出される。こんなに心に深く思ふ者はどこから來たものであらうか、子

供たちの面かげが眼と眼の間に何の故かかかつて安らかな眠りもし得ないことだ。

といふ歌ですが、心があまつて、思ふ通りには言ひ切れぬ程の感慨をこめた歌です。歌ひやうも率直で、かかり言葉や枕詞などは殆んどなく、すぐに思ひをのべたといふことがわかります。

瓜や栗は子供の好むもの故、そんなものをどこかで食べてゐると、つい子供等に食べさせたいとすぐに思ふ、こんなに寸時も心をはなれぬ親子の情は、むしろあやしい程のものだ。夜もふと子供等のことを思ふと安眠も出來ない。さうした親心の切切たるものをよんであるので、これが千年も昔の人の歌つた詞かと思ふと、千年も昨日の如く今日の如き思ひがいたします。

はじめのことわりがきは、お釋迦様が、金口といふのは尊いお口から、等しく世の人を思ふことは丁度羅睺羅のやうである（ラゴラは釋尊の御實子の名）。またおつしやる事に、愛といふものは子を思ふ心にすぎたものはない。至り至つた大きい聖人さへなほ子を特に愛するお心があつた。まして世間普通の人間が誰か子を可愛く思はぬものがあらうぞ。といふ前書をおいてゐます。ここが唐の國に渡つて特に學問した人の學理がまじつてゐるのですが、それもきはめて自然でおもしろく書かれてあります。

日本の人は神代から自然によい所に心が行つて眞をたどりながら議論をたてなかつた。支那や、外國では早くから議論が盛んでありました。日本では親子の情なども何も言はぬがちやんと道にかなつてゐました。そこを新人憶良が理論づけたところがあります。これは憶良が、太宰帥大伴旅人に從つて九州太宰府の役人をしてゐた時の作であります。

反歌

(803) 銀も金も玉も何せむにまされる寶子に如かめやも

反歌と申しますのは、長歌の後に附隨する歌を言ふのでありまして、長歌の中

で言ひきれなかつた思ひを、短歌にして補足をするやうな役目を勤めてゐるものを言ふのであります。右に書きました反歌は全體からいふと、概念的に歌はれてありますが大變有名な歌であります。

歌の心は、金、銀、玉といふやうな、さういふこの世で尊いものがどれ程の値うちがあらう、それよりも尊いのは我子である。卽ち我子に勝る寶はないといふ氣持を強く歌つてあるのです。

「何せむに」といふ言葉の意味は、何の値うちがあらうかといふことになります。また、「如かめやも」はしくはおよぶことで、やもが反語になりますから、及ばうか、及ぶものはない、といふことになります。

次ぎに說く長歌は萬葉集のなかでも實にめづらしく思想的な傾向があり、その時代の新人憶良の得意な作であり、衆人を驚かせただらうことは想像にあまりあるものです。

貧窮問答の歌一首竝に短歌

(892)

風雜り　雨降る夜の　雨雜り　雪降る夜は　術もなく　寒くしあれば　堅鹽を　取つづしろひ　糟湯酒　うち啜ろひて　咳ぶかひ　鼻ひしびしに　しかとあらぬ　鬚かき撫でて　吾を除きて　人は在らじと　誇ろへど　寒くしあれば　麻衾　引被り　布肩衣　有りのことごと　服襲へども　寒き夜すらを　我よりも　貧しき人の　父母は　飢ゑ寒からむ　妻子どもは　乞ひて泣くらむ　此の時は　如何にしつつか　汝が世は渡る

天地は　廣しといへど　吾が爲は　狹くやなりぬる　日月は　明しといへど　吾が爲は　照りや給はぬ　人皆か　吾のみや然る　避廻に　人とはあるを　人竝に吾も作るを　綿も無き　布肩衣の　海松の如　わわけさがれる　襤褸のみ　肩に打ち懸け　伏廬の　曲廬の內に　直土に　藁解き敷きて　父母は　枕の方に　妻子どもは　足の方に　圍み居て　憂ひ吟ひ　竈には　火氣ふき

立てず　甑には　蜘蛛の巣掻きて　飲炊ぐ　事も忘れて　奴延鳥の　呻吟び
居るに　いとのきて　短き物を　端截ると　云へるが如く　楚取る　里長が
聲は　寢屋處まで　來立ち呼ばひぬ　斯くばかり　術無きものか　世間の道

反歌

(893)　世間を憂しと耻しと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあら
ねば

この歌は、問答の形式で詠まれてありまして、「汝が世は渡る」のところまでが問ひであり後が答になつてゐるのです。一通りこの歌の意味を解きあかしてみます。

風まぢりに雨が降る夜の、その雨まじりに雪が降る夜は仕方もなく寒いからして堅まつた鹽を少しづつかじりながら糟をお湯でとかした酒をすすりながら、咳をして、鼻をしくしくいはせて澤山もない鬚を撫でながら、自分を置いて偉い人は無いといふやうに心では誇りを持つてゐるけれど、體の方が非常に寒いので粗末な蒲團を引き被つて着物や羽織のありつたけをまだその上にかけて寒さをしのぐけれども、それでもなほ寒い。さういふやうな晩を自分よりまだ貧しい人達のお父さんや、お母さんは飢ゑてさぞ寒からう、その妻や子供は泣いて物を乞ふであらう、かういふやうな、せつぱつまつた生活をしてゐる人は、どういふやうにしてその世渡りをするか。

と、ここまでは憶良その人がやつてをつた生活か否かは判らないのですが兎に角、糟酒でも飲み、心に高き誇をもつて暮らしてゐられる人が、ずつと貧しい人に問ひかけた形になつてをります。そして答へる人は非常に貧しい生活をしてゐるその頃の時代のさういふ社會を代表して答へてゐるやうに思ひます。

天地は廣いと言ふけれど、自分の爲には狹くなつたのであらうか、月や日は明るいといふけれど、自分のためにはお照し下さらないのであらうか、世の中の人はみんなかういふ目に遇つてゐるのか、或は自分ばかりがかういふ目

にあつてゐるのか。たまさかに人間に生れて來て人並に自分も生長してきたのに綿もない袖なしのボロボロになつてさがつてゐる、さういふ物を肩にかけ、低くかたむいた家の中に直下に地面に藁を敷いて、お父さんや、お母さんは枕の方に妻や小供は足の方にお互に寄り合つて憂ひ嘆き合ひ、竈には物を煮る煙も立つことなく御飯をむす（昔はむしたもの）器には蜘蛛が巣をかけて御飯を炊くことも忘れられた有様で苦吟してゐるのに、「とりわけて短いものの端を裁る」といふ諺にあるやうに笞を持つた里長の聲は寢屋まで來て呼び立てる、こんなにも仕方のないものであらうか、世の中の道といふものは。

と非常な嘆息をした貧者の言葉であります。これはその頃の貧しい者の狀態を長歌の形で詠みあげてあるのでありまして、藝術的方面から言へば詩的分子の乏しい氣がしますが、その時代の一面の社會狀態を題材に取つて飾りなく歌ひあげた所に新しい味があるのです。

部分部分に優れた寫實があり、憶良らしいユウモアもあり、作者の風貌がしのばれます。

この歌も全體から見れば觀念的色彩が勝つてゐるので、憶良といふ人の性格がさういふ人であつたらうと思はれますが、遠い昔の人としてここまで材を進めたのは全く珍らしいことです。

次ぎの反歌は世の中は苦しいとも恥しいとも思ふけれど飛び立つて逃げて行くことは出來ない、自分は人間であつて鳥ではないから、と言つてゐるので、ここにもなかなか突込んだ特色が見えます。

然し憶良といふ人は理論ばかり云つてゐた人ではありません。前歌のやうに實にやさしいよい素質のあつた人、やはり大歌人の一人です。

第七講

(924) み吉野の象山の際の木末には幾許も騒ぐ鳥の聲かも

(925) ぬばたまの夜の深けぬれば久木生ふる清き河原に千鳥數鳴く

この二首はこの萬葉讀本の第四講に、はじめてその名が出て來た、あの有名な山邊赤人の作であります。

山邊赤人は柿本人麿と共に、ただに萬葉集に於ける大歌人であつたばかりでなく萬葉以後、千有餘年の今日に至るまで、その右にいづる者もない歌の聖と申されてゐる人であります。ここに書きました二首の歌は、前にのべた富士の歌と共

に到底釋いても釋ききれない至上至極の藝術上の絶品でありまして、歌といふものの形式がいかに短くても、金無垢の價値であつて、たとへば奈良の大佛像も尊いが、浅草の觀音樣が一寸八分の佛體で、遍く衆生の渴仰を受け給ふ如き、大小によらざる高き高き傑作であります。

この歌は年代不明とも言はれますが、また聖武天皇の神龜二年、吉野離宮に行幸のあつた時、從駕した時の歌とも言はれて居ります。

この歌には前に長歌があり、その後にこの二首の歌が反歌として書かれてあります。長歌の方は、吉野離宮の立派なのをその自然の景色と共に讃へ歌つたもので、反歌に赤人の個人の詩情の動きを歌つてあります。

歌のこころは第一首目の方は、

吉野山中にある象山（山中の一山の名で象の形に似てゐるので其名があつたと申します）の山間の木末には澤山の鳥が鳴いてゐる事よ、あのさわがしい聲はまあ。

と感歎したのでありまして、この歌の深い味は私は、自分の常にあがめてゐる島木赤彦師にくれぐれも教へられて居りますので、その感激を、大方の歌を好む人人に分けたい思ひで、優れた師の君の御評を左に書いてみます。そして味つて頂きたいと存じます。

「境は吉野山中で、耳に聞えるものは木末木末の鳥の聲である。一首の意至簡にして、澄み入るところが自ら天地の寂寥相に合してゐる。騒ぐというて却つて寂しく、鳥の聲が多いというて愈〻寂しいのは、歌の姿がその寂しさに調子を合せ得るまでに至純であるためである。試みに、第一句より第五句までを誦して見れば、それがいかに至簡の力の進行であるかが分る。直線であるから寂しく、寂しいけれども勢があり、勢があるけれども、それが人麿の如き豪宕な勢でなくて、虔ましく潛ましき勢である。これは、人麿、赤人の特徴を較ぶるに根柢的對照をなすものである。」

この御批評は歌と對等するほどの名批評と思ふので、私はこの上に申すこともありません。私の觀照眼もこれによつて磨かれ、魂にまで沁み徹つてをります。

次の一首にうつつて申しますと、歌の意は

ぬばたまは枕詞で意味がありません。夜が更けてゆくままに久木の生えてゐるあの清らかな河原に千鳥がしばしば鳴くことである。

と、深夜の敍景をしてをるのでありますが、あるひは神經の粗い人は、かうした歌を見のがしてゆくかも知れません。然しこの歌の持つ靜肅な感動と、清らかなものの感受とは、なんとしても讀めば讀む程、尊くなつてくるので、前の歌と雄ない程の傑作と言はれてをります。

この歌の中で「久木生ふる」の久木は、今のところいかなる木であるかは、はつきりしてをりません。「木ささげ」であらうと說く人もあり「くぬぎ」であるとも申されてゐます。歌が深夜の歌ですから、どうしてそれがはつきりと「久木」と判つたかと、そこに疑ひをはさむ人もあるのですが、私自身としては、赤人は吉野離宮へ行幸のお供をして、そこらの景色を最早よく知つて居つただらうと思

はれます。月光の明らかな夜ででもあつたらうかと我が師は申されました。

兎に角深夜の歌に「久木生ふる清き河原」と明瞭に歌つてをるのは、問題にもなりませうが、どういふものか、私には、それなるが故に一層清明の感を強くなされるのは、空想的に嬉しがつてゐるのとは違つて、何かよつてきたる歌の引力といふものを感じさせられます。

いつたい赤人といふ人は、性格的に静粛なものを持つた人らしく、大波のやうに寄つてくる感情もよく沈潛して、そのもつとも深い命をとらへ、それを極めてつつましやかに歌はれてゐます。赤人以前にも自然観照の歌をなす人はありましたが、赤人にいたつて、實にはつきりと、よく自然を詠じたものがその生涯の歌に數多くあり、この時代の代表的自然歌人とまで言はれたのも、眞に根ざし深い言葉と思はれます。自然觀照の歌は、何か人間に通はぬ如く考へる人もあるやうですが、かういふ歌の例を見ると、かかる境地に心が入り得た、そこにその人の性格が、歴然と見えて面白い限りです。

大伴宿禰家持の初月の歌一首

(994) 振仰けて若月見れば一目見し人の眉引おもほゆるかも

この歌の意は、はるかに初月を見やると、自分が一目見た美しい娘の眉墨を引いたほのかに美しかつたさまが思はれる。と、詠んだもので、大方の人人の註釋によると、この時家持は十六歳であつたらうと推定されてをります。そしてそれにしては歌の内容が早熟すぎる、つまり初月といふから、美人の娥眉を思つて詠んだ歌で、年よりも早く女性美に思ひを寄せて詠んだものと思はれてゐます。然しこの歌は、その前の歌に大伴坂上郎女初月歌一首とあつて

(993) 月立ちてただ三日月の眉根掻き日長く戀ひし君に逢へるかも

といふ戀歌が詠まれてゐるから、家持もそれに影響を受けて詠んで見たのが動機

ではないだらうか、とも言はれてゐます。總ては成程と頷かれるのですが、大伴坂上女郎には二人の娘があり、家持とは從兄妹に當る間柄で自然さうした令嬢達と相見る機會も多く（上の娘は後に家持の妻になつた人）自づから心にもなく、かかる歌を詠み得るやうになつたのだらうなど私は一人考へて、面白く思つてゐるのです。この歌を讀むと私はまた、坂上大嬢（姉の方）が家持に贈つた歌

春日山霞棚びき情ぐく照れる月夜にひとりかもねむ

といふ歌があつて、いかにも深窓の姫君が思ひあまつた戀歌を家持に贈つたといふ感があり、前述の家持の歌と共にほほゑましく感じられた事であります。

冬十二月、太宰帥大伴卿の京に上る時、娘子の作れる歌二首

(965) 凡ならば左も右も爲むを恐みと振りたき袖を忍びてあるかも

(966) 大和道は雲隱りたり然れども我が振る袖を無禮と思ふな

この歌は前に述べました太宰帥大伴旅人卿が大納言に任じられて、京都に向つてのぼる時に、馬を水城（ここは天智天皇の御代に、太宰府防備の爲にきづかれたところ、今もその舊跡があります）に止めて、太宰府の今まで住んでをつた自分の家を望みみられましたその時に、大勢の府の役人達が卿を送つて來たなかに、兒島といふ一人の遊行女婦がまじつて居りました。なかなか才氣のあつた女であつたらしく、大伴卿の宴會の席などをうまくきりもりしてお役に立つてゐた、さうした婦人であつたらしいのですが、この歌を通してみる彼女はなかなかの才女で、いかにも日頃のよき取りなし振りの才氣と眞情が現はれて居ります。歌の意は

貴方樣が凡その方ならば、卽ち貴方樣は尊いといふ意味をあらはしてゐます。「かもかもせむを」は、ああも、かうもして、お別れを惜しみませうものを、

高位の方故、畏れおほいこととしてお別れに振りたい袖さへも虔み忍んでをります。

と、つつましく己れを知つて、情ふかきお別れを申し上げたのであります。何といふ愛すべき婦人であつたかと、今更ながらゆかしく思はれる次第です。

次の歌は旅人卿のこれから行かれる大和道は雲に隠れましたけれども、私がお名殘を惜しんで振る袖を無禮なことと、お思ひ下さいますな、といふ意を言つてゐるのでありまして、心に畏れを持ちながら、いよいよお別れとなつて旅人卿の行かれる姿が小さくやがて霧に隠れるやうになつた頃、つつしんで袖を振つてゐるところが目に見えるやうです。これは歌であつて同時に彼女の心であります。

それに對して旅人卿は

(967) 大和道の吉備の兒島を過ぎて行かば筑紫の兒島おもほえむかも

(968) 丈夫とおもへる吾や水莖の水城の上に涕拭はむ

と、あくまで氣品高く、しかも彼女の心を充分に受けて歌を返してをります。吉備の兒島は今の岡山縣兒島で、今は半島になつてをります。

十六年甲申春正月十一日、活道岡に登り、一株の松の下に集ひて飲せる歌

(1042) 一つ松幾代か歴ぬる吹く風の聲の清めるは年深みかも

右の一首は市原王の作。

木の下で酒宴をはつたことは、古い世からの習はしでそこになんとも言はれぬ古の樣を偲ぶことが出來ます。現代でもピクニックのお辨當を開くところは、木の下か水のほとりか、自然人間として寄り行くところでせう。面白いことだと私は考へてゐます。

この宴は天平十六年のことで、御作者は市原王であります。御酒宴の半ばに松

風の清韻を聞きながら澄みゆく心をもつて、かういふ老松の幾世か經たる年月を思ひ、その年月を經し松に吹きこもる風の音に、限りなき人生を思ひ清るものの尊さを思ふ一首の調子が、讀む者にたとへば松風の音の如く長く響いてくる心地がいたされます。以上は第六卷の中からぬいてお話したものであります。

第八講

萬葉集第七卷には柿本人麿歌集から出た歌が多くのせられ、しかもそのなかで人麿作とはつきり書いてなくても、格調高く、雄大な手腕をふるつた歌で、人麿ならではかく詠み上げ得ることは出來ないと信じられてゐる傑作がいくつもあります。たとへば

雲を詠める

(1088) あしひきの山河の瀬の響るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る

の如き、その句句が、自からに疊みゆく歌の勢、その生動の起伏等、たうてい凡手の及ぶところでないことが一讀直感されてまゐります。

歌の意を直譯的に申してみますと、第一句の「あしひき」といふのは、前にも申したと思ひますが、山の枕詞でありまして特別の意味はありません。注意までに申しておきますが、これは必ず「あしひき」であつて「あしびき」と「ひ」を濁つて讀んではならないと私は學びました。

山川の瀨の鳴ると同時に、弓月嶽には一帶に雲が立つたといふ歌ですが、直譯などでは誠につまらなくなつてしまひます。この歌は弓月嶽といふ、卽ち三輪山の東方に續く高い山の名で、その山の谷川の瀨が急かの雨氣を含んだ風に吹かれてさんさんと四方に鳴り渡る、それと同時に目前の高い山が雨雲にたちまちおほはれて來る、そのなんとも言へぬ風神靈動の現象を深く捉へて歌ひ上げられたもので、島木赤彥師は

「一首の風韻自ら天地悠久の心に合するを覺えしめる。人麿作中最も傑出したものの一でありう。」

と激賞せられてゐます。このほかにもまだ人麿歌集の中から出たもので

(1161) ぬばたまの夜さり來ればまきむくの川音高しも嵐かも疾き

(1269) 卷向の山邊とよみて行く水の水泡のごとし世の人吾は

等、得難い作と思ひますが、みな、第七卷のなかの人麿歌集から出たもので、優秀作としてたたへられてゐます。

倭琴を詠める

(1129) 琴取ればなげき先立つけだしくも琴の下樋に孀や匿れる

この倭琴といふのは我國特有のもので多くは六絃の琴をかく申します。歌の意はさしてむづかしいことはなく、

琴を彈かうとすればその音よりも歎きの方がまづ先に來る、もしかすると、この琴の胴のなかに、自分の思つてゐる妻が隱れてゐるのではないかしら。

と戀しい妻の上を思つて詠んだ歌で悲痛な思ひが籠つてをります。この歌を讀ん

でみますと、このおもひ妻はもう世を去つてしまつた人のやうにも受けとれますが、また何か悲しい周圍の事情で別れわかれになつてしまつた婦人のことを忘れかねて詠んだ歌のやうにもうけとれます。

なににしても男として實に率直に妻を愛する情をうたひあげてをりますので、讀んで一層哀れが身にしみてまゐります。萬葉時代の人は何によらず自分の感情をかく素直にうたひあげてあるのが特色でありまして、後に支那の思想が大大的に入りこんで來てから、女、童の知るところに非ずなど、妙に妻なり婦人なりを男子が人前でいとほしむことが恥しいことのやうに片寄つた考へ方になつてしまつたのは、悲しむべき現象と私は考へます。まして歌詠む者は感情を素直に表現してこそ得難い歌も出來るわけだと私は考へてゐる次第であります。

(1411) 福のいかなる人か黒髪の白くなるまで妹が音聞く

この歌も前歌の如く男の歎きを素直にうたひ出でたる歌でありまして、しかも

この人こそは愛する妻に先立たれた人なのであります。

自分の愛する妻がはや死をしてしまつた、考へても考へても妻の面影は心を去らず何にかへてなぐさむべくもない、その鬱鬱しい氣持をもつて世の中を見渡すと隨分年とつた夫婦をも見る。その時この作者が卒然としてあのやうに二人とも黒髪の白くなるまでも共に暮してゐる幸を驚歎するのであります。その氣持が卽ちこの歌になつたのであります。歌の意は

幸のいかにか多い人がこのやうに黒髪の白くなるまで、卽ち白髪になるまで妻の聲をきくのであらうか。

といふのでありまして「いかなる人か」の「か」は第五句の「妹が音聞く」までにかかつてゐる反語となるのであります。黒髪の白くなるまで妹の聲をきくさういふ幸な人が幾人あるであらうか、さういふ幸福な人は幾人もない。と反語的に深き歎きをうたひあげたものであります。

この場合ただ單に妹といはないで、妹の聲といつたところに切實な思ひが表現

されてゐることを、私達はよく注意して讀まなければなりません。

お話は一寸それますが、私は曾て飜譯ものでしたけれど彼の有名な「噫無情」を讀んで、もつとも感銘の深かつたところは、あのジャン・バルジャンが年老いて後、自分の苦勞して育てたコゼットを嫁にやり、ひとり寂しく老境に入つてゆく、だんだん目もみえなくなり、耳もきこえなくなつた頃に、唯ひとつ彼を樂しませたのは、時折のコゼットの訪問でありました。

コゼットは若く美しく樂しい生活をしてゐるので、この老人のところを見舞つても、さへづるが如くそれからそれと物語をするのですが、いたく年老いたジャン・バルジャンにはもうよくその内容は判らないのでした。コゼットが「お判りになりますか」ときいたとき、答へて「お話の内容は判らなくても、ただ貴女の聲をきいてゐるといふことだけで非常に幸ひなのです。もつともつと話して下さい」と言つて、樂しげにその話に聞き入つてゆくことが書いてあつたと記憶します。あの一節は讀んでからもう二十年以上になりますけれど、未だに感動をよびおこされる深い感銘がありますが、この歌の作者が妹の聲をきくと普通のやうなことを讀んだその心持が實にあはれで、この歌の價値を特殊なものにして居ります。

(1265) 今年行く新嶋人が麻衣肩の紕は誰か取り見む

この一首は防人の妻の歌として有名であります。防人といふのは、關東方面のお百姓さんのなかから、壯丁を選んで（今日でいふ新兵のやうなもの）上の御召集にあづかり、九州方面の防備にあてられた者を申しましたもので、年齡などにも規定がありますが、そのことはくはしく書くと長くなりますので、ここでは書かぬことにします。

とにかく大方の防人は青年が多く、既に妻帶してゐる人もありましたが、まだ妻のないものも多くあるといふやうなわけで、この防人の出立の時のさわぎはなかなか大變なものらしかつたのですが、それがやはり日本男子として勇ましく雄

雄しく父母や、妻に別れて出で立つけなげな歌が殘されてあります。

今から思へば、關東から九州の地に行くくらゐ何事もないやうに思ひますが、今から千年も昔のことであつてみれば、電信、電話、飛行機の便はもとより、乘りこんでゆく船さへも順風を待つてめいめいがこいで行くといふやうな、粗末な旅行より出來なかつた頃ですから、この別れは生別死別をも兼ねたほどの重大な別れであつたらうことは想像に餘りあることであります。

以上のやうな譯で防人の歌は萬葉集卷二十にかなり澤山のせられてをりますが、それは、天平勝寶七年のものでありまして、その方の係りであつたらしい大伴家持が大體の選をしてのせられてあります。

その卷でなくて（その卷にもありますが）かうして途中に出てくる防人の歌は、更にその時よりも古い時代の歌でありまして、とにかく防人に關する歌は、いかなる歌でもみな、心情がこもつてゐて深く心を動かされます。

七卷にのせられたこの歌は、立つてゆく防人の妻か、あるひは許婚の人か、さ

うした婦人の詠んだ歌で第一句二句の「今年行く新嶋人」といふ句は簡明にしてよく事情を語つてをります。歌の意を申してみますれば

今年召されて行く新嶋人、貴方のそのお召しになつた麻の着物、この麻の着物の肩などが長い道中で、よれよれになつたやうな時には、私がおそばにゐなくて誰がまあ、とりつくろつてくれませうか。

といふ意を表はしてをりまして、實に愛情の深い素直な心の表現であります。

この時代の關東地方の農夫たちは特別の學問をしたわけではなく、まして歌の道にあかるいわけはありません。然し心の中の眞情が溢れほとばしつて出てくる時、日本人はおほくこの調子をとります。日本人と歌といふものの、よつてきたる因緣の如何に深く自然であるかを本當に私共は思ふべきであります。

防人の歌をお話したついでに二十卷の方の防人の歌の秀れたものを少しお話してみませう。

(4373)
今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は

この歌は、天平勝寶七年乙未二月十四日に防人として出立した常陸の國の壯丁の歌で、如何にも張り切つた元氣に充ち、しかも我身をつつしんで、大君に仕へまつる嚴肅な氣持を持つた立派な歌と存じます。歌の意は

防人として出でたつ今日からは我身の事は顧りみない、大君の御楯として今、いやしい私が出立するのである。

といふやうな心持で詠んだ一首でありまして、至純な心からこの光榮を喜んでをります。なんといふ力強いことでせう。しかもこれは遠い昔の話だけではない。現在事變の下に私共はこの時代から續きつづいた、かかる至純の聲を聞き、歌を聞き、いやつぎつぎに世界に類なき國の民として立つてをります。たとへ女と言へどもこのことを深く思ふべきだと存じます。

第九講

志貴皇子の懽の御歌

(1418)
石激る垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも

この集の第八卷を開きますと、一番先にかかれてあるのが右に書いた志貴皇子のこの御歌でありまして、讀めば直ぐに判るやうに、とりたててここが大變面白いとか秀れてゐるとか、はつきりさしていへないやうでゐて、しかもこの歌は非常に秀れたよい歌で、島木赤彦師などは、萬葉集の中でも特に秀逸の作であると激賞されてをりますが、私もその通りだと考へます。

歌の意をざつと述べてみますと

石激るは枕詞になつてをります。垂水は地名だとも言はれ、また水の湧き出て落ち垂るるのだとも解釋されてをりますが、私は水の湧き出て落ち垂るるぐらゐの意に解釋して味はつてをります。それであまり垂に力を入れて考へてをりません。「上の」はほとりの意でありますからで「水のほとりの」といふくらゐの氣持で味はつてをります。そのほとりの蕨が芽ぶき萠え出る春となりました。

と内容はそれだけのことでありますが、歌の最初の詞書に、特に懽の歌と加へられてあるのが、この一首の上に滿ち渡つて限りなくのびてゆく、おさへきれない懽の心を表現してゐる歌であることが、自然に感じられてまゐります。春來る懽と同じやうな懽が調子の上に張り滿ちてをります。

初句の「石激る」からずつと伸びて下句の直接なる心を表現してゐる句を味ふと、たとへば水に湧き上る波紋の如く、限りなく廣がつて行く樂しさがこもつてをります。

かういふ歌を讀むと騒がしい理窟つぽいことは一切歌をよむ上には必要のないことだ、眞情を率直に吐露したところに、却つてよい歌が生れるのだといふことがよく解つてまゐります。

志貴皇子は　天智天皇の皇子であらせられ、萬葉集中に幾首かのよい歌を殘されてありますが、中でも私は、この歌を愛誦してをります。この懽が何の御懽であつたかははつきりしてをりませんが、それでゐて、自然に希望に充ちた明るい心持を讀む者にむかつて感じさせる溫い力をもつてゐます。

山部宿禰赤人の歌

(1431)　百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも

前にくはしくのべました山部赤人の歌であります。いかにも赤人らしい虔ましさがあつて、可愛らしくほほゑましい一首であります。

百濟野は大和國北葛城郡百濟村附近の野原と言はれてをります。その野原を赤

人は、かつて冬の日に通つたことがあつたのでせう。そしてもう枯れはてた野原に、萩などがともどもに枯れてゐるその細枝にとまつて遊んでゐる鶯を見つけて、その時ハッと心を動かさせられたのでせう。

春告鳥はまだ春も告げ得ず、枯萩の枝に遊んでゐる。あの色ある小鳥の愛らしさを心に瞬間深く印象されたのでせう。ここまでが「百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯」になるのです。

しかし赤人は、その後ずつと特にその鶯のことを思ひつめてゐたのではなかつたのだと思ひます。春がきて赤人の家のほとりでも樂しい鶯の聲が聞かれる頃となりました。そしてその鶯の高鳴をきいた時、ハッと赤人の心に過ぎし冬の日に枯野に遊んでゐて、自分の目に近近と見た、その時の鶯を瞬間はつきりと思ひ出したのです。そしてその時の可愛かつた印象が赤人の心を優しい世界に引入れてゆくかの如く、あの鶯も今頃は鳴いたかしら、と可愛い優しい感じにしみじみと打たれる、その心から出たのがこの一首でありませう。

鶯といふ小動物を通して、赤人の天地自然によせる大いなる愛が、言はず語らずに人をうなづかしめる、ほんたうに優しいよい作だと思ひます。この歌の味ひを思ひますと、次ぎの

(1511) 夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寐宿にけらしも

御作者は舒明天皇でありますが、この御歌が心に浮びます。御歌の意は

「夕されば」は「春去れば」「秋去れば」の如く「さ」をにごつて讀まないやうに、卽ち「夕べになりくれば」の意になります。夕べになつてくればいつもいつも近くの小倉山に鳴く鹿が、今夜はその聲のきこえないのはもう寢てしまつたらしい。

と鹿の上をひそかに思ひやられ心をうごかされておいでになる。かかる御歌を拜讀しますと、まことに舒明天皇の御性格の御慈愛深き御一面を自然に感じさせられてくるので「鹿」といふ動物を通して、限りなき慈愛深き御心の溢れた、得が

たい御歌とおしのび申し上げるのであります。

私どもはよくかういふことを聞きます。今のやうな忙しい社會生活をしてゐるものは、どうしても人事歌が生れるのが自然であつて、いはゆる自然鑑賞の歌などは少し間遠いやうな氣がするといふやうなことを聞きますが、かかる御歌を拜見してゆくと、歌は直に人を題材に取らなくても、鶯でも鹿でも、さては花でも雲でも、それに對する作者の感動の深さ純粹さによつてなまなかの人事歌よりも、その各〻の持つてゐる個性を說明以上に感じさせられるものだといふことを、思はざるを得ない次第であります。

(1513) 今朝の朝け雁が音聞きつ春日山黃葉にけらし吾が情痛し

御作者は穗積皇子でございます。穗積皇子は天武天皇の第五皇子にあたらせられます。

この御歌は、いかなる時の御作かはつきり分りませんが、御歌の調子といひそ

の含みといひ、何か一種言ふべからざる悲しみを胸にたたんで詠まれた御歌のやうで、一番初めにお話した志貴皇子の懽の歌と竝べて味ふ時、歌といふものは形は小さくても、人に與へる感動は實に千萬無量の重みがあり、眞心といふものはどんな形をとつてもその眞價を表はすものであるといふことを、思はせられることであります。

この穗積皇子は、お若い頃但馬皇女に關して御惱みがあり、穗積皇子はしばらく近江の志賀の山寺にお籠りになつた時もおありになつたのですから、或はその頃の御作とも想像されます。歌の意は

今朝の夜明けに雁が鳴きわたつてゆく音をききました。

と此處で一たび切れます。それがいかにも印象深く讀者の心にひびいてきます。それから

春日山と、現在の雁の鳴く音をきいた心から鄕土の山を聯想し、あの春日山も今頃は定めし黃葉したことであらう。と思ひやつて、更に現在の自分にか

へり、「私の心も痛く悲しいことよ。」

と感慨をのべられたのであります。この場合結句の「吾が心痛し」はまことに痛切な心をこめた表現で、主觀の句ながら、上からおしてくる迫力が、この結句を少しもいや味なく充分に受けてゐる、そこを注意すべきでありませう。まことに好ましい一首として、私は愛誦いたします。

遠江守櫻井王、天皇に奉れる歌

(1614) 九月のその初雁の使にも念ふ心は聞え來ぬかも

天皇の賜へる幸和の御歌

(1615) 大の浦のその長濱に寄する浪ゆたけく君を念ふこの頃

櫻井王は河内の王の御子であります。天平十六年二月、大原眞人の姓をたまはつて、大原眞人櫻井と申し上げ、臣下に列した方であることが知られてをります。御歌について例のやうにその意を申してみますれば

九月になつて、はじめて鳴聲をきいた「その初雁の使にも」と申しますのは、支那文學の影響をうけたもので、雁の足に書を結びつけて、消息を通じ得たといふことが漢書にあるので、日本でもそれを文學的にとり用ひましたのでありまして、これが「その初雁の使にも」と歌ひいでられた源になるのであります。次は、お思ひ下さる御心は聞えてまゐりません。と天皇に向つて、やや甘えた御催促をなされたのでありまして、ごくくだけて言つてみますれば、九月になつて初雁の姿を見ても、私には御手紙も下さらないことでございます。

と御心やすだてに、天皇にやや甘えて、御催促なされた御心もちがどこかありますので、これをもつてみても、櫻井王と天皇とのお間柄は（この天皇は聖武天皇でゐらせられます）特に御親密であつたことがおしはかられます。

これにお答へになつた聖武天皇の御歌が、また非常に面白い御歌とおもはれます。

「大の浦のその長濱によする波」までは次のゆたけくにかかる序詞でありますが、大の浦は遠江の國の（どこかはつきりしませんが）浦をさしてゐるのであらうと思はれます。長濱もやはり地名のやうです。地名ではあつても亦同時に「ゆたけく」に縁もゆかりもない地名ではなく、この序詞を用ひたために一層ゆたけさが廣く大きく感じられてくる効果をあらはしてをります。かういふところは萬葉時代の人人の持つ大きい特色でありまして、ほんたうに一つの枕詞でも序詞でも巧まずして、巧みに用ひられてゐることは、注意して味ははなければなりません。御歌の意は

「寄する浪」と三句で一旦切り、長濱によする浪の如くゆつたりと大きく櫻井王を思ふこの頃であるよ。

といふ意味の御歌でありまして、いかにも大きくゆつたりと歌はれてあるところに、えもいはれぬ味はひがあり、天皇の御性格をさへゆたかに偲びまつる面白い御歌と飽かず私は味はふ次第であります。

第十講

さて此の度は、第九卷の中の秀れた歌や、面白い歌について述べるのでありますが、この九卷の特色は、傳說をよんだ歌の多いことであります。自然長歌の形をとつてうたはれた歌に非常に面白い作がありますから、憶良の歌の時と同じく、ここでは高橋蟲麻呂といふ人の長歌の中から選んで、私が日頃愛誦するものを書いてみようとおもひます。

蟲麻呂といふ人は、人麿や、赤人と同じく、歌の世界に功績を殘した人ですが、官位は低い人でありました。しかも非常に優れた歌を殘してゐるにもかかはらず、その優れた味を認められるやうになつたのは、やつと近年にいたつてからでありまして、言ひかへれば近代人に共通な、新しい感覺があり、その表現法をとつた

人であるとも思はれます。

この人の作中水江浦島子（浦島太郎の噺）を詠める一首は、非常にふつくりと面白く詠みいでられてあり、私はその書き出しの

(1740) 春の日の　霞める時に　住吉の　岸に出で居て　釣船の　とをらふ見れば
古　の事ぞ念ほゆる

といふところからして、既に恍惚と夢の世界に引きこまれてゆくやうな面白さを感じて飽かず讀みかへすのですが、これは誰も知つてゐる浦島太郎の物語りを歌にしたので、かなり長い歌になりますから、紙數の都合上、ここでは惜しいけれど、これをやめて次の歌にうつります。

(1742) 河内の大橋を獨去く娘子を見る歌
級照る　片足羽河の　さ丹塗の　大橋の上ゆ　くれなゐの　赤裳裾引き　山藍用ち　摺れる衣著て　ただ獨　い渡らす兒は　若草の　夫かあるらむ
櫃の實の　獨か寢らむ　問はまくの　欲しき我妹が　家の知らなく

反歌

(1743) 大橋の頭に家あらばうらがなしく獨ゆく兒に宿貸さましを

今までお話してきたいろいろの歌からこの歌にきますと、何か作そのものから受ける感じに風變りなものがあり、歌としての積極的なものを感じさせられます。詠みかたが印象的であるのは優れた歌として當然のことでせうが、この歌になつてくると、その印象づけかたに個性的の工夫があることを思はされます。

一通りの批評をすると、この歌は前半の繪畫的美觀を受けるのに、後半がやや常套的で物足りなさをかんずるやうなものがないでもありませんが、よく讀んでゆくとそれがまたしほらしくて、さういふ物語りめかしい印象をうける乙女が、しほしほと物思ひ顔に橋を渡つて向うに行つてしまつた、といふやうなことに說

明しきれないひとつの人生を暗示してゐて、限りなく哀れになつて來るのです。

さういふ見すごせばみすごしてしまふやうなことを取りあげて、これだけの暗示を與へたといふことは、作者その人が深く感動してをるからで、そこにとてもよい味があると思ひます。

歌の意を申してみませう。

「級照る」は、片足羽河の枕詞として用ひられてありますが、この「片」を「肩」の義にして、何かなよなよと嫋やぐ肩といふ意にいひかけてゐる説に、私は賛成して居ります。

「片足羽河」は、河内の國にある河と言はれてをりますが、どの河かいろいろ説があつてはつきりしません。兎に角相當の大きな河であつたらしい。その河に赤く塗つた大橋がかかつてをつたものとみえます。

その橋の上を赤裳の裾を引いて山藍で摺つた着物を着て、ただ獨りで渡つてゆく娘は若草の（若草といふ枕詞は夫にかかる）夫があるであらうか。「橿の實」のがやはり枕詞になつて獨りにかかる。上の若草は若い娘の夫を想像するのでありますから、自然若草といつて前後を柔くしました。下の獨りにかかる「橿の實」といふ枕詞はドングリのことでありまして、ひとつだけづつ實のるから獨りにかかるのであります。それともまだ獨身であるか、その娘に問ひたいものでありますが、その家を知らないことです。

と言つて美しく粧うた若い娘がただひとり物思ひのある如く、赤塗の大橋を渡つてゆくのを見て、哀れに心ひかれつつも、狎れなれしくものも言ひかねて、思ひをこめて見送つてゐる。さういふところを歌つた歌であります。なかなか優れた情ふかくよい歌だと思ひます。

次の反歌は

大橋のあたりに家があつたならば、心寂しさうにひとり渡つてゆく娘に宿を貸さうものを。

と詠まれてあるのでありまして、この美しく粧うた娘が、なんだかさびしさうに

伴人も連れずに獨り渡つてゆくといふことは、この反歌の第三句「うらがなしく」といふ句が全體に情景を語つてゐるのでありまして、長歌と反歌の關係がまことによくいつてゐるところを味はふべきであります。

筑波山に登る歌一首并に短歌

(1757) 草枕　旅の憂を　慰もる　事もあらむと　筑波嶺に　登りて見れば　尾花ち
る師付の田井に　鴈がねも　寒く來鳴きぬ　新治の　鳥羽の淡海も　秋風に
白浪立ちぬ　筑波嶺の　よけくを見れば　長き日に　念ひ積み來し　憂は息
みぬ

反歌

(1758) 筑波嶺の裾廻の田井に秋田苅る妹がり遣らむ黄葉手折らな

この歌は同じ高橋蟲麻呂の作でありまして、その時代には交通も不便でありましたから、特に大和の地を離れて地方官として常陸方面まで出張してゐることは、いかに家戀しく、大和戀しいことであつたか、現代の人人の想像しかねるものでありました。山上憶良の歌に

(880) 天ざかる鄙に五年住ひつつ京の風俗忘らえにけり
(881) 吾が主のみたま賜ひて春さらば奈良の京に召上げ給はね

とあるのも、憶良が筑前守となつて、筑紫に在り、思ひを大和に在る旅人に贈つて切なる訴へをなした有名な歌でありますが、地方官としてはみなこの思ひがあつたのであります。

この蟲麻呂の歌もさうしたこころをもつて味はふと、實にしみじみとした歌でありまして、そのしみじみとしたなかに蟲麻呂特有の深い哀れがあり、自然鑑賞にも感情の透きとほるやうな靜かなものがあつて優れた長歌といふべきです。

草枕は旅にかかる枕詞、旅の憂といふのはいま言つたやうなさうした鄕愁をもちうつうつとしたことを言つたものです。そのわびしさを慰めることも

あらうかと、筑波嶺に登つて四方の景色を見れば、「師付」は常陸の内の地名ですが、そのあたりには、秋も深くなつて尾花が散るやうにほけだつてゐる。そして雁がさむさうに來て鳴いてゐます。新治の郡にある鳥羽の湖水も秋風に白波がたつてをります。山の高い處からこのよい景色を見下してゐると、長い間心にうつうつと積み重なつてゐた佗しさは、止みました。いかにも自然鑑賞の優れてゐる點が、清かに蟲麻呂といふ人の人格を偲ばせます。

次の反歌は

筑波嶺の山裾のほとりの田に實のり滿ちてゐる田を苅つてゐる娘達にやるための、黄葉を手折りませうよ。

感傷が徹つてゐて、あれこれと説明しないで自づから常陸あたりの秋景色が身に沁みるやうに思はれ、その中に溫い人情が流れてゐる、さういふものを感じさせられます。尚、蟲麻呂の歌には非常に優れてゐて愛誦するものがありますが、次にうつりませう。

(1777) 君なくば何ぞ身裝餝はむ匣なる黄楊の小梳も取らむとも念はず

この歌は石河大夫といふ人が播磨守となつてその地に下つてをりましたが、任がみちて京に上る時に、大夫に親しんでゐた田舍の娘子が、石河大夫に贈つた歌のなかの一首であります。

貴方樣がおいでにならないならば（卽ちお歸りになつてしまへばの意）何のために私は身を裝ひませうぞ、大切に思ふ梳箱の中の黄楊の梳さへも手に取らうとは思ひませぬ。（さうしたことも、もう無駄なことになりました。）

と、思ひつめた女心をやるせなく歌によつて吐露した、實に去りゆく石河大夫に離れ難い情を寄せた激しい歌でありまして、かうした強い調子の歌は、後世の優美で社交的な婦人達の歌には、決してみることが出來ません。ここに萬葉集の大

きい特徴があるのでありまして、私などはこの眞情がうれしくたのもしいのであります。

(1791) 旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群

天平五年に、唐に遣はされる使の船が難波から船出する時に、ひとりの母親がやはりその船に乘つて出て行く子どもに贈つた歌の、これは反歌であります。

この歌こそは理論からきたのでなしに、自づから歌ひだされた母性愛の極致を言つたものでありまして、凡そこれを讀む人の心を搔きゆすらずにはおかない力を持つて居ります。

今旅立つこの一行が宿りをする野原に、霜など降つて寒い夜は、そのなかにまじつてゐる我子を、翼で被つてあたためてくれよ空とぶ鶴の群よ。

とせつぱつまつて、空とぶ鶴に願ひをよせた切なる母のこころは尊いといふ言葉も愚かな程であります。

第十一講

第十卷は新訓萬葉集の上卷の最後となつてをります。その卷を開くと第一に

(1812) ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つらしも

といふ一首が目につきます。この歌を私は非常に愛誦してをります。まことに萬葉集の歌らしいおほらかさを持ち、蒼古たる古調の中に巧まずして自ら「春來る喜び」を溢るるばかり感じてゐる自然さがあつて、何處か匂ひやかに、厚みのある中から、歌の自然の姿が伸びて來てゐる。言葉にも言ひあらはしがたい程の好ましい一首だと常に感動してをります。歌の意を申してみますれば

「ひさかた」は「天」にかかる枕詞で、意味はありません。次の「天の香具山」

といふのは香具山を齋き尊んで詠んだので、一體古へはこの天の香具山は天から降つて來た山として尊び、且つ木木の繁りが立派な見事な山で、神神がこの山にお降りになる山として信仰してをりましたから自ら「天の」といふ言葉が添へられたのであります。

それで直ちに歌の直譯をしてみれば

香具山にこのゆふべ霞が棚引いてみえる。この風景を見れば早くも春がたつらしい。

といふほどのことを歌つた歌でありますが、それが上句が「久方の天の香具山」と莊重な調子で歌ひ出され、三句以下からは、いかにも春來るらしい心持で、今日のゆふべ霞が棚引いてみえる、春がたつらしい。と目前の印象的な風景を詠んで、率直にそれによつて躍りたつ心を述べて結んであります。

この歌は第三句の「このゆふべ」といふ言葉が何でもなく輕く用ひられてゐるやうで實は實際を捉へてをります。卽ち今日のゆふべ霞が棚引いてゐるのに驚いたのですから、時季はまだまだ寒さが殘つてゐて、奈良邊りでは春來ることも考へられない頃の一夕、はからずも香具山に棚引いてゐる霞をみて「寒い寒いと言つても、もう春がやつて來つつあるのだ」といふことを、非常に深く感動したのであります。新鮮な若葉の匂ひをきくやうな快さが溢れて居ります。

(2075) 天地と別れし時ゆおのが孏然ぞ手に在る秋待つ吾は

この歌は、秋の部にある歌ですけれど、秋も初秋の卽ち七月七夕を歌つた歌であります。

七夕祭はもと支那から傳來したといふことでありますが、萬葉集の昔から傳統的に日本の歌集に殆んど初秋には歌はれてある歌で、それ程に吾が國の人人の心にも深く深く受入れられるものがあつたとみてよいのであります。

現代知識階級の家庭では、七夕祭といふやうなことを重大視しなくなり、時代と共にこの祭も亡びてゆくのではないかと思はれますが、私には今もなほこの祭

をいたく懐しむ心情があります。それは現代のやうに科學の進歩した時代に、なほ昔同様の憧れをつなぐことはむづかしいかも知れません。

聞くところによれば、七夕頃に丁度牽牛と織女の兩星が最も近づくといふ時でさへ、織女がたとへ牽牛に一瞬の合圖を送つたとしても、牽牛がそれを認めるのには十六年かかり、その答を織女が知るのはまた十六年の歳月がかかるといふことでありますが、そんなにはつきりしてしまつては、夢も憧れも消えてしまふのが當然でありますが、この七夕の傳說は、前に述べたやうに、日本ですらも萬葉の昔から歌に歌はれ、深く人人の心を惹きつけてゐる話でありますから、私は長く詩情をつづけたいと思ひます。

あの大空に限りなくある星の中で、一つの星が一つの星に向つて、一年に一度だけ逢ふことを許されてゐるといふこの不思議な運命を物語にして味はふことは、科學者は知らず、多少でも詩心のある者の心を動かさないではゐない物語でありませう。

人間の生活で考へてみても、假令百年一緒に暮してみても、つひに心の通はぬ夫婦もあり、たとへ一年に一夜相見る契りであつても、永遠の昔からこの一夜を互に戀ひわたつて、大きな川を渡つてまでも妻に通ふ心、それをまちわぶる妻、これが詩でなくて何でありませう。

私はこの物語をあくまで讃美します。古來七夕の歌には傑れた歌が幾首もありまして、特にここにあげたのが一番よいといふのではありません。然し私はこの歌ひ出しの堂々としてゐるところが、いかにも好ましいので、この歌をあげたのであります。歌の意は

天と地と別れた時から、といふのですから天地の始めからといふことになります。自分の妻として、織女は自分の手の中にあるのだ、と斷定したところがしつかりとしてをります。（もつともこの「然ぞ手に在る」の句はまだ他にも說がありますが、私はかう考へます。――）一たん切つて自分の思を豐かにのべてゐる。そして秋をまつ私は、と信じ切つた心情を堂堂と歌つてゐ

るところが、またおもしろいと思ひます。

萬葉の歌のあとに自分の歌などをならべるのは僭越至極なことですが、私はかつて七夕祭に

天の原かぎりも知らぬ大空に一つの星を戀ふる星はも

何か人生にもふれて考へさせられる心地で歌つたものであります。

(2103) 秋風は冷しくなりぬ馬竝めていざ野に行かな萩が花見に

萩はいかにも秋の風情を如實に表はしたやうな灌木であります。暑い夏の日に苦しめられて喘いでゐたものが、涼風がたつて忽ち蘇つたやうな氣持になる、その喜びが自然に野に出たい心を誘ふのであります。

この歌はさう解釋のむづかしい歌でもなく、清楚にして爽やかに人にひびいて來る歌で、むづかしい意味はちつともありません。

秋風は涼しくなりました。馬を竝べてさあ野にゆきませう、萩の花を見に。といふだけのものでありますが「馬竝めて」と言つてゐるところに、やはり古代の面影があり、「いざ野にゆかな」といふ句に、實に待ちかねてゐるものに向つて飛びだしてゆきたい心のきほひがみえます。好ましい歌の一首です。この場合萩の花も野萩の花をさしてゐて更に趣があります。

(2109) 我が屋前の萩の末長し秋風の吹きなむ時に咲かむと思ひて

この歌はまだ萩の咲く少し前の歌でありますが、やはり萩によつて秋の涼しさや、あはれさを心待ちしてゐるその人の風情も目に見る如くであります。これは何かしら女人の歌のやうに思はれます。

歌の意は、

私の家の萩の枝が垂れるばかりに長い、それは秋風の吹くだらう時に咲かうと思つて。

といふ歌ですが、直譯すればかうした味のないものになつてしまひますけれど、歌そのものは實に瑞瑞しい感情の流露してゐる詠みぶりで「我が屋前の萩の末長し」と二句で切つたところにかへつて効果があり、簡明に庭の萩が蕾をもち始めて、末長く伸びて來た風情を寫してあります。

それから下の句は非常に主觀的にこの萩を歌つてありますが、それが決してわざとらしいいやみを伴なはず、妙なひねくりにもならず、その萩の心と作者の心とが深くつながり合つて詠み出された歌であつたことは實にたふといと思はれます。

この歌については島木赤彦先生が『「萩のうれ長し」と第二句に簡明直截な切り方をしてゐることも、この歌の命を考へるに大切である。それあるゆゑ第五句がここまでぴんと響き返すのである。これを意義の上から言ふも「萩のうれ長し」ありて第五句生き、第五句ありて「萩のうれ長し」が生きる。』とその命にふれて評されてあるは味はふべきことだと思ひます。

(2262) 秋萩を散らす長雨の零る頃は一人起き居て戀ふる夜ぞ多き

この歌は今までお話したいろいろの歌に較べるとずつと纖細な詠みぶりで、元始萬葉調からやや降つてゐる感をうけます。

卽ちそれだけ感情の細やかさがあり、細味があり、萬葉も末期のものであることが自ら首肯かれるものでありますが、それだけまた單純でなく複雜で、人生味のこもつた味はひをもつた歌と思はれます。歌の意は

秋萩を散らして幾日も幾日も雨のふる頃は心もうつうつしく寢もやられず、獨り起きてゐて戀ふる夜の多いことよ。

と嘆いてゐるのですが、いかにも一篇の物語を讀むやうな哀れを含んだ一首であると思ひます。

この作者はたしかに深く切ない戀をしてゐる。その戀は晴れて成就する戀ではないのでせう、いはばかくれて窃かに戀ひわたつてゐるといふ戀でありませう。

しかしこの人は日々に戀に苦しんでゐるのでせう。折から季が秋になつてたださへもの寂しいのに、萩の花を散らしてしみじみと雨の降る日がつづいてゐる。日頃もはれることのない戀であるが、この「長雨の零る頃は」と一層深く戀心のやるせなさを持つたのでせう。

「ひとり起きゐて戀ふる夜ぞ多き」は千萬無量の思ひのこもつた句で、飛んでもゆきたいその人のところへゆくことも出來ず、寢もやらずひとり起きゐて戀ひわたつてゐる、さうした苦しい夜が多いといふことを詠んだのでありませう。

かうした歌は人生を順調に經た人には出來ない歌で、幸福に醉つてゐる人は夢にも思はない歌でありませう。それだけに私はいよいよ深く心にしみて愛誦するのです。

人生の深さには限りがない。地下水の如く表面にあらはれないまでも、深くひそかに戀ひわたる心をもつといふことは、たしかにあり得るあはれであります。

第十二講

萬葉集を學びたい人達のために、その初歩としてごく解りやすく、そのすぐれた歌を語る、といふ建前で筆をとりはじめましてから、丁度十二講になります。そして新訓萬葉集でいへば、上卷としてまとめられてある第十卷のうちから選んでお話をいたし終りました。

然しまだここにあげて語つたものは一杯の水にもすぎない程のものでありまして、萬葉集のなかには、實に滿ち滿ちたよい歌がをさめられてあり、その味には汲めどもつきぬ吹上水の如き新鮮さと純粹さをもつた、人間の眞心の深さ、高さ、はてなさが歌はれてをります。

それで到底語りきれぬ歌のかずながら、はじめまだ難かしいかと思つて、わざ

とぬいた歌とか、また句に問題があつて、短い解釋では解ききれない歌とかのなかで、是非語つておきたい歌の解釋の追補をして、氣のすむやうにしてみたいと存じます。自然各卷からとびとびに拔くことになりますから、その點をお含み下さい。

(15) 渡津海の豐旗雲に入日さし今夜の月夜明らけくこそ　（卷一）

この御歌は天智天皇が、まだ中大兄皇子と申上げてゐた時代、播磨國に行啓なされた時御詠みになつた長歌を入れて、三首の歌の一番終りの一首であります。いかにも雄大な、夕燒空とともに、更に偉大な皇子の御人格を御偲び申上げる御歌であります。御歌の意は

海原のうへの、「豐旗雲」といふのは豐かに旗の如く、大きく空になびいてゐる雲の意です。その棚引いてゐる雲に夕日がさして、と、ここで一たん小休止があり、息を入れて、定めて今宵の月夜は照り渡るであらうよ。

と、目前の入日の前の大風景に感動し、そして今夜の月は明らかであらうよと推測した、その時のお心うごきを率直に歌はれたものと思ひます。結句が、いろいろ問題となつてゐます。

(51) 采女の袖吹きかへす明日香風京を遠みいたづらに吹く　（卷一）

この御作者は、志貴皇子であります。皇子についてはすでに述べたところと思ひますが、天智天皇の皇子で、後の光仁天皇の御父上にあたられます。この御歌は持統天皇が藤原の宮を御造りになつて、明日香の宮から御遷居なされた後、皇子が舊き明日香の京を懷しまれて御詠みになつた御歌でありまして、一種言ふべからざる懷しみを自らにして感じさせられる、調子といひ、歌詞といひ、品高く傑れた御歌として有名であります。御歌の心を申してみますと、

「采女」と申しますのは、宮廷に仕へてゐる婦人のことであります。明日香の地に都のあつた頃は、その美しい采女達が華やかに宮仕へをしてをり、そ

の匂ひやかな袖を吹きかへした風は、特に「明日香風」と地名を詠みこんで風を歌つたところに、いふに言はれぬ愛着が感じさせられます。その風が今は都が遠くなつたからして、ただ寂しく、いたづらに吹いてゐる。

と古き都をしのばれてゐるのでありまして、よく情景を詠み出してあります。この御歌の場合、第二句の「袖吹きかへす」については「吹きかへす」と現在に詠つてある一句が一寸奇異に感じられますけれど、皇子はその時、さながら現在にありありとその風情を思ひうかべて詠まれたので、この場合どうしても「かへせし」では表現はし切れぬ程の心におなりになつてをつたことが自らこの句をなさしめたことと申されてをります。なかなか味はひの深い言葉だと思つて居ります。

(133) 小竹の葉はみ山もさやに亂げども吾は妹おもふ別れ來ぬ
ればば　（卷　二）

この歌の作者も、すでに前に述べました、有名な柿本人麿の作であります。はじめ第二卷を選ぶ時に、第一に目についた歌でありましたが、やや難かしいところがありますので、易しい方の歌を書いておきましたが、やはりどうしても氣がすまないので、追補として加へておきます。

これは人麿が晩年石見國の地方官として彼地に留つてゐる時に、官用を帶びてか京に上ることがあり石見國に妻を殘して京に上る時の長歌の反歌であります。

一體人麿の長歌は實に堂堂として、しかも巧みなる修飾をほどこし、渾然と立派に構成され、實に比ひまれなる、たとへば大洋の波の音を聞くが如き調べをなしてをりますが、特にこの時の妻に別れる長歌は、思ひつきない情深いものであります。その後の反歌でありますから、一層身にしみて、人麿といふ人の一面に徹つてゐる愛情の盡きぬこまやかさを感じるわけであります。

「小竹の葉はみ山もさやに」は今、自分がのぼつてゐる山の道に小笹がさやさやと音をたててゐるのを含んだ言葉であります。卽ち

小笹の葉がさやさや鳴つてゐる山道に於て、その騷がしさにもまぎれず、自

分の心はひたすらに家に殘して來た妻のことを思ひつづけてゐる。別れて來たのであるから。

といふ心のこもつた歌でありまして、島木先生のお言葉を引いて言つてみれば、

「相思ふ妹は既に遠く、向ふべき京は青雲の果てにある。耳に笹原の風音を聞き、心に妹を思うてゐる。思ひが悠遠で、情が自から寂寥である。その悠遠さも寂寥さも露はに現はるるところなくして、自然に一首の間に沁み出てゐるところ、藏するところ、徹するところ皆深いのであつて、これまた寫生の至境に入れるものとするに足りる。」

とありますところを、私はひたすらに繰り返して敎へられてをります。

(142) 家にあらば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る (卷二)

この御歌は孝德天皇の皇子であつた有馬皇子の御詠みになつた歌の一首でありまして、これには悲痛な御事情がありますが、今はそのことにふれません。

御歌の意は

家にをれば、「笥」といふのは食物を盛る器のことであります。さうした食器に盛つて召上がられる御食事を旅（「草枕」は旅の枕詞）であるからして椎の葉に盛つて供へられる。

と、その時の皇子の御境遇の移りを心にこめて歌はれた一首でありますが、古への旅の不自由さは、今人の到底想像つかない程のものがありまして、草を刈つて假小屋を作り、その中にとまつて、木の葉などに燒米などを盛つてそれを食し、實に簡單な日をつづけながら旅したものであつたことを、現在の我々は深く考へ味はねばならないと思ひます。

それゆゑこの一首は實に簡素にして思ひ深く、その旅のあはれを傳へてゐると存じます。

しかし私は旅といふものの不自由さは、今日においても、昔からいへば比べものにならない程惠まれて來た今日に於てさへ、この一首を思ひ出して、僅かに自

ら慰めるほどの不自由な思ひがあります。

家を離れて來ると、たとへ汽車といへども一定の場所に腰掛けたきりで、親切のない汽車辨當を味はひ、小さい窓から顔を出して、停車場で賣るつまらぬものを賴むやうにして買つて、徒然な長道を埃りまみれになつてゆく時には、つくづくと「家にあらば」と繰返さなければをられませんが、それでさへ昔の旅を思へば雲泥の差のあることを知ると「旅は憂いもの、つらいもの」といふ古人の言つたことも、心に深く思はせられる次第であります。

(242) 瀧の上の三船の山に居る雲の常にあらむとわが思はなくに

御作者は天武天皇の皇子である弓削皇子が、吉野山中でお詠みになつた心深い一首であります。歌の意を申してみますと

「瀧」と言はれましたのは、昔この山の吉野川の流が瀧津瀨をなしてゐるところがありまして、幽邃な風景でありました。そこが自然にたぎといふ固有名詞になつたのです。

その瀧の邊りの三船山といふ山に、動かずにたつてゐる雲が重重しくて永久にそこにあるやうに思ふけれども、雲のことだからしてやがて流れ去つてしまふことを思ひ、自分もまた永久に生きてゐることが出來るとは思はれないことだ。

と重重しくたつてゐる雲の形を御覽になつて、一種の無常感にさそはれて詠嘆なされた御歌でありますが、まつたくよむものの心にもしみて感慨なきあたはずの感をうけます。

同じく島木先生の御評に實に言ひ得て餘すなき評がありますから、同時に此處にしるしておきませう。

「目に見るものは山と川とその間を去來する白雲である。その前に立つものは、運命の上にある只一箇の人である。そこに至れば皇子の貴きを以てしても、自然の中の一存在たるに過ぎない。皇子は、そこに深き人生の姿を見て、無限の感慨

を發せられたのである。山河は永久であつて、人生のみが倏忽無常である。」
まことに御作の貴さについて言ひ得た名批評と感心せざるを得ません。

さてこれで上巻の講座を終りました。まことに地味なもので、現代の尖端をゆく人人にはふさはしからぬものであつたらうことを、私は自らよく知つて居ります。しかし假令、お一人であつても、この講座によつて萬葉を愛し、研究してみようとする御縁をつなぐことが出來たとすれば、私の深く感謝するところであります。

次の講からは引きつづいて、下巻の評釋をいたしたいと思ひます。

第十三講

この講から新訓萬葉集によつて言へば、下巻として集められてある第十一巻から筆をおこしてお話を書いてゆかうと思ひます。

この巻の初めをあけてみますと、そこに「旋頭歌（せどうか）」と書いてあります。「旋頭歌」と申しますのは、歌の一つの體でありまして、たとへば、短歌が五・七・五、七・七であるのに對して、旋頭歌は五・七・七、五・七・七の六句から成立つてをります。初め五・七・七の三句で一段落となり、更に下の五・七・七を歌ひ起すところから、頭を旋（めぐ）らす歌、といふ意味がもたせてあるのです。

萬葉集の歌の體は、長歌、短歌、旋頭歌の三體で歌はれてゐるのであります。萬葉集にも、隨分氣のきいた詠みぶりをしてゐる歌があります。たとへば大津

皇子が石川郎女にお送りになつた御歌、郎女がまたこれに和へまつれる歌などは、その代表的のものでありませう。

(107) あしひきの山の雫に妹待つと吾立ち沾れぬ山の雫に

(108) 吾を待つと君が沾れけむあしひきの山の雫にならましも

のを

よめばよむほどおもしろさを感じさせられますが、それがいかにも眞實味があつて、小手先のうまみに墮ちてゐないところが、萬葉の歌の大いなる特色であらうと私は考へてゐるのであります。

(2373) 何時はしも戀ひぬ時とはあらねども夕片設けて戀は術無し

この歌は特に註を加へるまでもなく讀んで直ちに首肯ける歌と思ひます。特に現在一筋なる戀をもつてゐるやうな人には一入痛切に受入れられる歌と思ひます。何時と言つて戀しく思はない時といふ時はないけれども（卽ち何時も戀しく思つてをります。といふことになります）不斷の戀ではあるけれど、特に夕方になつて來ると戀しさが、どうにもならない。さういふ苦しい思ひになつて來る。

と、切切たる眞情を率直に、直接に、歌つてあるのでありまして、かういふ歌を「正に心緒を述ぶる歌」と申します。たとへば序を借りて歌ひだしたり、譬喩をもつて言ひ表はしたりしないで、直にその心を述べる「正述心緒」の歌と言はれてをります。さういふ種類の歌を更に進んでお話してみませう。

(2382) うち日さす宮道を人は滿ち行けど吾が念ふ公はただ一人

のみ

いかにも純情的な、戀の極致を思はせられる一すぢの調子をもつた、おもしろい歌と思ひます。

「うち日さす」は「宮」にかかる枕詞。宮中に通ふ大路に、人は數限りなく通つてゆくけれど、私の思つてゐる方は、その限りない人の中にまぎれない唯一人のあのお方だけです。

ときつぱり言ひ切つてしまつてゐるところに、この歌の全精神がこもつてゐるのであります。

これをずつとくだけて、今の時代にしてのべてみますと、たとへばここに一人の純情な戀をしてゐる娘があるとする、銀座通りのやうな雜踏した通りに立つて歩いてゐても、自分の心にはつきりとうかんでゐるのは、その戀ひわたつてゐる人一人であつて、あとは何百人の人が往き來をしてゐる大通りであつても、その人の交つてゐない人通りは、極めて虚ろなものに感じられるでせう。

賑やかならば賑やかなほど、人通りが繁ければ繁いほど、その人のゐないところの賑ひといふものはいよいよ虚ろに、いよいよ寂しく感じられる、さうした氣持をこの一首から汲みとることが出來る歌であります。

「うち日さす宮道」といひ、「吾が念ふ公は」にかかつて來る人の雜踏が、雜踏ながら美しく表現されてゐる、さういふところにも、敎へられるところのある歌とおもひます。

(2395) 行けど行けど逢はぬ妹ゆゑひさかたの天の露霜にぬれにけるかも

この歌は全體から來る調子にいかにも底悲しいものがあつて「行けど行けど」と追つてゐる妹は、もう世を去つた人であるやうな感じさへ受ける程の悲痛の氣持をもつた歌ひやうであります。

この歌の作者は、それ程も相手の妹を深く眞に思つてゐるのでありませう。それが自らこのもの悲しい調子を帶びて來たのだと私は考へてをります。

「行けど行けど」と言ふのはどこかで逢ふことを約束してある戀人に、遠い夜道を行けども行けども逢はなかつたのでせう、一途に思ふその妹に逢はな

いために、自分の身はしつとりと夜露に沾れました。

といふ意を切に詠みあげたものでありまして、「久方の天の露霜」といふ句については、赤彦先生が激賞されてをりますが、全く戀の歌であつて、しかも高く人の心をひき上げるちからを持つた立派な表現だと思ひます。

(2396) 邂逅に吾が見し人を如何ならむ縁を以ちてか亦一目見む

この歌も極めて解りのよい歌で、しかも含むところが儚いやうで、儚きがゆゑにいよいよ切なる心をもつて歌はれてある思ひ深い歌と思ひます。

何かの機會にひよつと見て何とも知れず心を惹かれた人を、どういふつてをもつてか亦一目でも見ることが出來るであらうか。

と詠嘆したのでありまして、この歌は二人の間が相通つてゐる歌ではありません。そこまではまだ行つてゐないので、作者その人に、たへがたい焦躁と不安とがあつて、どうかしてもう一度逢ひたいものだと願ふ心を如實に歌ひあげてあります。

たとへばお祭りなどの場合に、はうばうの人が集つて來て若い娘や若者などが距てなく睦じく言葉をかけあつたりなど出來る狀態におかれて、仲良く話しあつた若者を一方では忘れかねるのでありますが、祭りが過ぎてしまつて、各々の家に歸ると、近所でもない、親戚でもないその若者の在りかを尋ねて探しにゆくことも出來ないやうな場合、一方の心はそのことのみを思ひつめて、何かの手段を考へて、もう一度あのひとに逢ひたいものだと戀ひわびてゐる。さうした心持によつて作られた歌と思ひます。

この窮極にいつたのが八百屋お七の物語ではないかと私は考へるのであります。お七は火事で燒出されたため、駒込の吉祥寺に避難してゐた、その時美しい吉三と知りあひになりますが、新築が出來て我が家に立ちかへつてからは、吉三に逢ふ手だてがない、どうかして吉三にいま一度逢ひたい爲にいろいろ手段を考へて、また火事が出て家が丸燒になつたらば、とまで思ひつめて、つひに、おほそれた放火犯になるのでありますが、放火などといふことは、決してよいことでは

ありません。然しその心根には詩にも歌にもなるものがあります。

ここにあげた歌をよんで私はどういふのか何時もお七のことを聯想してゆくのであります。

(2394) 朝影に吾が身はなりぬ玉耀るほのかに見えて去にし子故に

一讀言ひやうなきあはれにうたれる歌と思ひます。

「朝影」は朝日をうけたものの影が、大變細長くうつるので身のやせることを、この集では朝影になつたと譬へてをります。

「玉耀る」は玉のきらきらする義で、夕べとか、仄かとか、はるかとかの枕詞として用ひられてをります。ほんの僅かに知つて何處かへ去つてしまつたあの娘のために、私はやせ細つて戀ひわたつてゐるといふ心を歌つたもので、まことに情の深い美しい歌であると思ひます。

萬葉時代の人は、後の世の人に比べて、のんびりして居りながら實に鋭い感覺をもつてゐて、自然の現象をも新鮮に鋭くとらへて歌に讀み入れてをります。

第十一卷にはまだまだお話したい歌が幾らもありますが、ここでとどめておきませう。申すまでもない事ですが、萬葉集には「戀」の歌のすぐれたものが澤山に集められてあります。「戀」とさへ言へば現代では下劣なもののやうにとる人が多いやうですが、さすが萬葉集の歌にはまじりものがなくて純情をこめてありますから、讀んでもすこしも厭味のものがなく、その至純至情にふれて、濁つた心をむしろ清められ、高く揚げられてゆく幸を直接に知ることが出來ます。尊い話です。

第十四講

第十二卷の歌についてお話をいたしますが、この卷は前卷の續篇とされてゐるもので、大體の調子が、前卷の調子と大差なく、前に述べた「正述心緒」の歌とか、「寄物陳思」の歌とか、大體戀歌をもつて終始されてゐる卷で、それも割合に新しく、奈良朝時代の初期に詠んでゐるもののやうであります。

この卷で目につくことは、色についてさまざまものの色を歌に取入れてあることです。これまでは色については白妙とか、紫とか、赤とか、割合に單純に色を詠み出でて歌つてありましたが、この卷ではたとへば、

(2935) 橡の袷の衣裏にせば吾强ひめやも君が來ませぬ

の如く、歌は特に傑れた歌とも思ひませんが、「橡の袷の衣」などいふ、一向榮えないものを取出して、歌にしたところに新しさがあります。

「橡の衣」といふのは、どんぐりの笠を煮だして、その汁で染めた黑色の着物のことで、賤しい者の着る着物であつたのです。しかしここに袷衣とありますから、その黑色に染めたものは衣の裏であつたのでせう。裏は表より從のものであるのですから、この歌の意味は、

私が、もし貴方をうらにして輕く思つてゐるのならば、あなたに强ひてお出で下さい、などと言ふものですか。それだのにあなたは進んでお出で下さいません。

と、ややじれて相手に申し送つたものでありませう。自分は重く思つてゐるのに、先方はそれ程でもないといふやうな氣持を歌つてあるのであります。作者は橡といふ言葉から推して、たいした身分の人でなく、野や山に働く人であつたかも知れません。

更にまた、

(2970) 桃花褐の浅らの衣浅らかに思ひて妹に逢はむものかも

といふ歌がありまして、桃花褐といふ一つの色が新に歌はれてあります。桃花色はこの時代から、浅い色としてさめやすい染色といはれてをつたものとみえます。なかなか氣のきいた比喩と思ひます。

歌の意は、

桃色に浅く染めた衣のやうに、浅墓に考へて、私はあなたにお目にかかるものですか。即ち心に深く思つてお逢ひするのです。

といふ意味が含まれてをります。

比喩を「桃花褐の浅らの衣」と桃色を浅い色にたとへてありますが、しかしこの言葉によつて、何となく華やかに粧つた人を想像させられるものがあつて、なかなか味はひの深い歌だと思はせられます。

同じやうな歌で、

(2966) くれなゐの薄染衣浅らかに相見し人に戀ふる頃かも

といふ歌がありまして、同じ「くれなゐ」でも、薄く染めてある色分けを詠んでゐるところに面白さがあります。隨分古代より時代がすすんでゐるといふことが、かうした歌のはしはしに受取られるわけであります。

(3074) 唐棣花色の移ろひ易き情あれば年をぞ來經る言は絶えずて

「唐棣花色」といふのは、何によつて染め出した色か、昔からまだはつきりと定まつてはをりませんが、庭櫻の花か、李の花か、木蓮の花かといふ説を出してゐる人もあり、とにかく染料に用ひる赤色の花であらうと言はれてをります。

この色も變りやすい色だつたと見えて、この歌の場合には「移ろひ易き」の枕詞となつてをります。

歌の意は、

あなたは變り易い薄情な心をお持ちになつてをりますので、私をお尋ねにもならないで、空しく年月が過ぎ去つてゆきます。お便りだけは絶えないのですけれど。

と、幾分皮肉を言つてゐるのでありまして、やはり古い時代には、決して歌に見出されない唐棣花色といふやうな新しい言葉が用ひられてあるのは、面白いと思つて私はよんでをります。

まだ十二卷には申上げたい歌もありますが、先をいそいで十三卷にうつりませう。

この十三卷は、萬葉集二十卷の中でも特色のある一卷として、昔からいろいろ問題になつてをります。集められた歌は、長歌の形をとつたものが最も多く、それが人麿の長歌のやうに、格調も修飾も整然と整つてゐる作もありますが、まだそれまでに形の整はない、發達の途次にあるやうな歌ひ方で歌つたものもあり、

歌として大變に古いものが集められてゐるらしく、同時にまた奈良遷都以後の作もまじつてゐるらしいので、新しいものと古いものとが、相まじつて編まれた一卷として、問題の多い卷となつてをります。その中で代表的に昔から言ひはやされてゐる歌に、

(3236) 空みつ　大和の國　青丹よし　奈良山こえて　山城の　つつきの原　ちはやぶる　宇治のわたり　瀧の屋の　あこねの原を　千とせに　かくることなく　よろづよに　ありかよはむと　山科の　いは田の森の　すめ神に　幣とりむけて　吾は越えゆく　あふ坂山を

といふ長歌の反歌として、

(3238) 相坂をうち出て見れば淡海の海白木綿花に浪立ち渡る

の歌がありますが、長歌の方は、

大和國の郷里の奈良から奈良山を越え、山城のつつきの原を過ぎ、宇治の渡りを越え、瀧の屋のあこねの原を、千年も萬年も通はうと、山科のいは田の森の神樣に幣を奉つて、願をかけて、自分はそこから相坂山を越えて、大津に通ふことである。

といふのでありまして、要するに奈良から逢坂山を越えて、大津の里に住む妻の許へ行く時の切なる思ひと、その道道の地名を巧みに詠んだ歌でありまして、それの反歌が名高い秀作として、今の世までも讃へられてゐるのであります。歌の意は

相坂山を出てみると、淡海の湖は、眞白い木綿花の散りかかつてゐるやうに、一面に白い波がたつてゐることだ。

と、そのえも言はれぬ風景に、身も心も打込んで、恍惚と詠み出されたものであります。苦勞して山をのぼつて、その上から目の下の湖を見はらす景色は、いかに印象的であるか、その心情がよくあらはれてをります。後年鎌倉の將軍源實朝は、この歌をいかにか愛誦したとみえて、

箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る
みゆ

と出藍のほまれある一首を詠みのこしてをられます。

(3251) 大舟の思ひたのめる君ゆゑにつくす心は惜しけくもなし

この歌は萬葉集の中でもよく人に知られた歌でありまして、女性の一途一心な純情が、高く詠み出だされてゐる歌であります。それは第一句の始めから一寸の搖るぎもなく、確固と自信をもつて歌はれてをるのでありまして、歌の意は、

「大舟の」は第二句の「思ひたのめる」にかかる言葉です。昔からの諺にも、何か危險の迫つた時に、しつかりとした人が一人ゐて、この人が「私がついてゐる、大舟に乘つた氣でおいでなさい」といふやうなことが用ひられ

てゐますやうに、頼もしい言葉として言ひならされて來てゐますが、卽ち小さいことにくよくよしないで大丈夫といふ心意氣をこめた言葉と思ひます。

そのやうにこの作者は、大舟に乘つたやうに心に頼んでゐる貴方だからして、と自分の夫に對する信頼の極を吐露してをります。それ程に信頼してゐる夫に盡す妻己れの身も、心も少しも惜しくはありません。

と、高唱してゐる歌でありますが、これは女の身として、一人一人が考へてみると、信頼する夫に向つてもつ女の眞情であつて、それを代表してゐるかの如き一首であると考へられます。

(3316) まそ鏡もたれど吾はしるしなし君が歩行より艱難み行く見れば

(3317) 馬買はば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ

この歌は一つの物語を持つた歌として、前の長歌にそのことが歌はれてをります。それによつてお話してみますと、貧しい夫婦があつて、その妻が、よその夫は山城の道を馬に乘つてゆくのに、自分の夫はその後から歩いて行くので、氣の毒で見るたびに泣かれる、それを思ふとどうしてもたまらないので、自分のお母様の形見として、大事に持つてゐるところの鏡と、蜻蛉領巾（今日で言へはショールのやうなもの）も添へてあげますから、貴方はそれで馬をお買ひ下さい、といつた長歌が前にあり、その反歌となつてゐます。

立派な鏡をもつてゐたとて、それが自分には今は何の役に立たう。歩きにくい道を、自分の夫が馬にも乘らずにゆくのを見れば。

と妻の嘆きを歌によみますと、それに返して夫の方が、

馬を買つてそれに自分が乘つたとしても、妻のお前はやはり歩いてゆかなければならない。そんなことよりも、たとへ石ころ道で歩き憎くても、私達は二人で仲良く助けあつて歩いてゆかうよ。

と、夫が妻の心に感激して、自分ばかりいいことをしないで、一緒に苦勞してゆかうといふ、夫は夫の心意氣を示した、優しい應答の歌となつてゐるのであります。

第十五講

萬葉集の第十四卷は、東歌といつて、當時文化の中心であつた大和を中心にした、今でいふ關西の方からいつて東に當る、いはば未開の地と思はれてゐた遠江、駿河、伊豆、武藏、上野、下野、信濃、常陸、陸奥、上總、下總の國など、かうした地方の人人の、素朴な率直な歌を集めて編まれた一卷であります。素朴な歌といひますのは、卽ち中央の文化に遠い國國の生活が、極めて素朴な生活であつたところから、自然にさうした歌が生れ、率直な歌といふのは、卽ちその人人が素朴な生活をしてゐたから飾りなく率直にものを言つた、その心のあらはれであつたのであります。

それからまた東歌の特色の一つとしては、その土地土地の方言や訛をもつて、

自然に心境を表現してゐるので、他の卷にみられない言葉が種種用ひられてゐます。それが決してわざとでなしに、まことに自然に、いはばその人人が、都風の言ひまはしを知らなくて、自分達の生活にぴつたりと立脚してゐるので、さういふ言ひ方をするよりほかに言ひ方を知らなかつたのですから、それがいかにも自然にぴつたりといつてゐるのでありまして、そこに味はひ深いものがあります。

このことは長塚節氏が、明治三十六年六月五日發行の「馬酔木」第一號に發表された東歌についてのお說の中に、實によく言ひあらはしてありますから、ちよつと左に拔いてみませう。

「日常の言語を以て作爲したる短歌の成功したるものが卽ち東歌なり。成功したる作なるが故に、之に使用せられたる方言訛語はしかく活動せるなり。東歌を模せむとする人の動もすれば、その方言訛語の珍らしきを見て、一意之を取らむとするものあり。抑も誤れるの甚だしきものといふべし。東人の東歌を作るや全く自然に出づ。後人の徒らに珍奇を趁ふものと共に語るべからず。」

とあるやうにこの卷は非常におもしろい特色のある歌がありますが、さういふことによらないで、歌は飽くまでその人の心からなる聲でなくてはなりません。しかしこの卷の特色は、さまざまな點で得るところがありますから、ほんの一部にでもふれてみようと思ひます。

(3351) 筑波嶺に雪かも降らる否をかも愛しき兒ろか衣乾さるかも

この歌の中で珍らしい言葉をあげてみれば「降らる」「乾さる」などですが、いづれも「降れる」「乾せる」の地方語、訛りでありまして、しかもこの訛語が入つてかへつて歌をおもしろくしたといふ感があります。

歌の意は

筑波嶺（といつて山ばかりでなく、その地方をもいつてゐる程のふくみがあります）に雪が降つてゐるのだらうか、それともあの可愛らしい娘が布を干してゐるのかなあ。

といふ親しみをもつた一つの心持を歌つたもので、この歌の場合は、その地方で、布を晒し干してゐる風景のおもしろさから、詠んだものではないかと思ひますが、そこに「愛しき兒ろ」の一句が入つて、俄かに歌が生きて來てゐるのをおもしろく思ひます。

折口博士のお説に「高い山から谷底みればお萬可愛いや布さらす、といふ風に近世には變化してゐる」とおつしやつてありますが、何にしてもこの歌には、民謠のにほひがあり、そのおもしろい味があります。

(3425) 下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと來ぬよ汝が心告れ

この歌は、年若い男子の熱情をそそいだ歌だと思ひます。

「下毛野安蘇の河原」といふのは、利根川に添つたところの、安蘇郡の邊であらうと申されてをります。そこの河原をこしてやつて來た人の歌でありまして、心を申してみれば、

下毛野の安蘇の河原から、づつとここまで石も踏まず、即ち宙を飛んでといふ心持で（地に足のつかない程、思ひ迫つた心をあらはすおもしろい言葉だと思ひます）、空を飛ぶ思ひで來たよ、と自分の心持を述べ、一心に飛んで來ました、さあ貴女の決心のほどを私に告げて下さい。

と純眞な一途な氣持で詠んである歌でありまして、世なれた都の人人には歌ふことの出來ないものが流れてゐると思ひます。

(3450) 乎久佐牡子と乎具佐助丁と潮舟の竝べて見れば乎具佐勝ちめり

これは、東國の一人の可憐な娘が詠んだ歌でありませう。厭味といふものが少しもなく、實に率直にむすめの心情を歌つてをります。乎久佐牡子も乎具佐助丁も若い農夫であつたことが、文字の上から察しられます。

とにかく二人の若者が、同時にこの可憐な娘が好きであつたといふこともわか

ります。娘の方からいつて一人、一人をはつきりさせるため、平久佐牡子と乎具佐助丁といふ言葉が出たのでせう。

この二人を竝べてみれば、娘は乎具佐助丁の方が自分は好きであるらしい。と率直にその心情を歌つてゐるのでありまして、この中で注意してよみたいのは、第四句の「潮舟の竝べてみれば」のところであります。潮舟といふのは、竝べてある、その枕詞風に用ひたものでありまして、漁舟が岸に幾つも竝べられてある、その風景を緣にして用ひた言葉でおもしろい言葉だと思ひます。そしてこの少女は、二人のひとをあちらこちらと較べてゐるのではなくて、無邪氣に二人の若者をならべて、心に思ひ浮べてゐるのだといふことを念はさせられます。

まだ思ひくらべる、といふやうな進んだ氣持ではなく、ただ自分に對して、好意を示す二人の人をならべて思つてみると、自分はどうも乎具佐助丁の方がまさつて好ましく思はれる、と實に正直に、感ずるところを歌ひあげたなかに、いい素質の娘であつたらうといふ好感を、人にあたへる歌と思ひます。そして歌の詠み方も率直さの中に、自然な詩情があふれてゐて一層感心させられます。

(3352) 信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く聲きけば時すぎにけり

この歌は、旅人の歌とみる人と、他の觀方をする人とがありまして、その人とりどりに味はふべきでせうが、今の場合、私はこれを旅人の歌としてお話してみませう。信濃の須賀の荒野と申しましても、今はつまり何郡のどことといふ風にわかつてはをりませんが、この人がその荒野に來た時に、ほととぎすが鳴いたのでせう。その鳴く聲を聞くと都を旅立つた時季を思ひ、つくづくと長い旅だつたなあ、時鳥の鳴く頃までには、歸つて來ると約束したこともあつて、一種の望鄕の念にうたれて詠んだ歌とも味はれるのであります。時鳥は夏の鳥でありますから、旅をしてゐる間に春が去つて夏が來たのを、この鳥の聲によつて刹那に深く感じた氣持、それが「鳴く聲きけば時すぎにけり」になるのであります。

(3515)　我が面の忘れむ時は國溢り峰に立つ雲を見つつ偲ばせ

この歌は前に述べた防人などとなつて、遠く行く夫との別れに、妻の詠んだ歌であらうと島木先生がいはれましたが、まことにさもあらうと思はれます。

この歌の中で「時」といふ言葉は、「時」の意で、關東語であるのです。また「溢り」はあふるるの意味であります。歌の意は

私の面影をはつきりとお感じにならなくなるやうな時には、國境の峰にあふれて立ちのぼる雲をみて、あの邊りが私のゐる國の空だと思ひやつてお偲び下さい。

といふやうな意味になりますが、この歌は思ひのふかい、言葉では言ひ切れないほどの情のこもつた歌ですから、讀んでよく味はふよりほかに、充分に書きつたへることも出來ない思ひがいたします。

以前にも述べましたやうに、古い時代には交通の便といふものが、とても今日

では考へられない程の不便があつたのですから、遠いところに旅をすることは、ともすれば、生別れの死別れとなることさへも、想像するにかたくないほどのことであつたのでせう。

勿論便りをするなどといふやうなことも困難を極め、たまたま道であふ人が、その方面の人ならば言傳をたのんでやる程度に過ぎなかつたのですから、出で立つた以上は、どんなに戀しく思つても、歸つて來るまで、その消息を知ることが出來なかつた、といふことになりますから、自由自在に動ける雲や風のたぐひを美しく思ひ、

風がもの言ひや言づてしよもの
風は諸國を吹きめぐる

といつた民謠も古くからあるほどで、そこに何ともいへないあはれが含まれて居ります。

小さい人間の身をもつて、見つくせない國のはてを思ひ、國境の峰のうへに立昇る雲の高きをうらやみ、その雲によつて、あの邊りと偲んでくれといふのは、哀れ至極の表現であります。かうした不便の中にあつて、人はいよいよ眞實になり、眞情の深い心ともなるのでありませう。なほ島木先生は

「せめて雲をみてあの邊りかと心あてに思ひをはせるほかはない。その心細さは夫の心であつて、同時に作者の心である。吾が面の忘れん時と言うてゐる心には、同時に、夫の面の忘れられん時をも考へてゐるのである。それゆゑ『國はふり峰に立つ雲』というてゐる。自分の住める國に溢れて山の上まで立つ雲は、それが雲であると共に作者の心でもあるのである。その雲を見て偲んで下さいといふのは、同時に自分の心を偲んで下さいといふ哀れなる訴へである。」

と申されてをりますが、實に身にしみた御批評と思ひます。

第十六講

さて今度は萬葉集の第十五卷に進むのでありますが、この十五卷は二つの部から成り立つてゐるのでありまして、最初は天平八年丙子夏六月「新羅に遣さるる使人等別れを悲しみて贈答し、及び海路情を慟しみ思を陳ぶ、幷に所に當りて誦詠せる古歌」とあり、その人人の出立から、その長い道中でたがひに詠みあつた歌をのせ、後の部は「中臣朝臣宅守狹野茅上娘子と贈り答ふる歌」とあり、この二つをもつて一卷とされてあります。

その中からほんの數首しか選出してお話出來ないことは、實に殘念なことで、この卷は非常に興味深く、ことに茅上娘子の歌にいたつては、全萬葉集に鳴り響くが如き、高い調べをもつてゐるのですから、むしろその一首、一首について、

お話したいと思ふほどのものが、あるのであります。しかしそれも出來ないことですから、ほんの數首を申すにとどめませう。

初め新羅國に遣はさるる人人が、その船出をする武庫浦で別れを惜しんで、たがひに別れの歌を贈答した、その歌について述べてみませう。

(3580) 君が行く海邊の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ

作者は新羅にゆく人の妻でありませうが、その名さへ記されてないところをみると役目の低い名もない下役の人の妻であることが想像されます。それで、たとへば大伴坂上郎女の歌のやうに、氣品には缺けてをりますが、そのかはり純情珠の如き、全身のいきを吹き入れたやうな誠が打込まれてある歌であることは、皆樣の直感にかならず響いて來るものと思ひます。

歌の意をのべてみますと、

貴方のおいでになる遠い海路の、その泊り泊りの宿りにて、もし霧がたちあらはれたならば、それは私があなた樣を戀ひ慕つて、たち嘆く、その息だとお思ひ下さいませ。

といふのでありまして、いかにも女らしく、思ひが迫つた嘆きであり、同時にその時代の交通の不便なこと、手紙も出すことも出來ず、まかりまちがつて、たとへ死ねばとて、電報もうつことの出來ない時代の、海路をひかへての別れを想像したならば、歌の一句一句が、ごもつともで、讀むたびに私は暗涙を浮べます。まことに身にしみ渡る心地がいたします。

夕霧が知らぬ旅路の宿の邊りに、ぽーつとたちこめるそれを見る夫の人は「あ、我が妻が今頃、自分を慕つて嘆いてゐるその息よ」と知る、それをあらかじめ妻が歌に詠んだのだと思うたならば、たとへ何千里の道を距てても妻を目近く感じ、その面影をはつきりと思ひ浮べることでありませう。なまなか便利な時代の電話などの話よりも、印象深き一首であります。

なほしらべてゆきますと、息が霧となつたことは、古事記の天照大御神と須佐

之男命の誓ひの條に「吹き棄る息吹之狹霧に成りませる神の御名は」云云とある、それによつた言葉だと思はれます。

(3669) 旅にあれど夜は火燭し居る我を闇にや妹が戀ひつつある
　　大判官
　らむ

この歌は、よみかへし、味はひかへしてみて、大變に深いものがある歌だと思ひました。詠みくちが個性あるゆき方でありまして、しかも突飛に流れないで、よく心を傳へてゐると思ひます。これを直譯してみますと、

自分はかうして旅にゐるけれど（卽ち夜は灯をともして、その時代としては贅澤にも思へたであらう）邊りを明るくしてゐる私を、遠く殘して來た妻は、戀ひ佗びつつ、あたりも暗いなかに心も闇に沈んでゐるであらう。

と、思ひやつて詠まれてありますが、實に個性の出た歌だと思ひます。そして、「闇にや妹が」といふ句は、代匠記や古義などを讀みあはせてみますと「燈」に對して「闇」といふところにたくみがあり、心の闇に沈んでゐるといふやうに說かれてありますが、それはたしかに心の闇にしづんでゐたことは想像されますが、私は「夜は燈ともし」は、いはば自分は不自由なく過してゐることをも含めて詠んであると思はれます。つぎの「闇にや妹が」は心の闇ばかりではなくて事實、昔の人人は多く太陽の昇るに目覺め、沈むに眠つたといふことも聞いてをりますから、特に遠くゐる夫を思ひしのんで、手許の明るい間は仕事をしてゐたとしても、夜とともに本當の闇の中で、遠い夫に戀ひわたつてゐたのではないか、少くもそれを想像して詠んだ歌ではないか、さうするとこれはたくみといふよりも、その時代のありのままの生活を歌にして、思ふ心を詠んだものではないかとさへ思はれて、一層哀れふかい思ひがいたします。

これで新羅に遣さるる使人等の歌は惜しいけれどおいて、狹野茅上娘子の歌にうつることにいたしませう。

この茅上娘子といふ人は極めて低い女官でありました。掃除、點燈などをつか

さどる下級の女官で、くはしい傳記はわかつてをりません。

この人の夫である中臣朝臣宅守といふ人が思ひがけない事情から罪人となつて、越前國に流されてゆくことになりました。それを妻の茅上娘子が嘆き悲しんで、天にもとどけとばかり慟哭の歌を贈り、宅守がこれに應へ、すべてこの二人が切切たる夫婦の情愛を贈り答へた歌、六十三首をどうして集めたのか、この十五卷の中にその全部が編入されてありまして、讀むとも盡きない綿綿たる純情を高潮してをります。大方萬葉をよむほどの人は知つてゐるところの、

(3724) 君が行く道の長路を繰り疊ね燒き亡ぼさむ天の火もがも

の傑作がその一つであります。これは娘子が宅守に贈つた歌でありまして、非常時に向つて立ち上つた、いかにも女らしく可憐であると同時に、痛痛しい切端つまつた心の聲を歌に托したといふ感を受ける、緊張に鳴り響くが如き一首であります。

歌の意を申してみますと、

貴方樣がいらつしやるあの長い道、しかも忌まはしい道を繰り疊んで、燒きほろぼしてもくれる天の火がほしいものだ。

この異常な心の狀態を歌つた一句、一句は決してたくみある言葉ではなく、率直にこの大事件の前に立上つた女心を歌つてあるのでありまして、從つてその價値は無限なものであります。

自分の命の命であるところの夫が、遠い越前國に流されてゆくことをとどめるのは、人力の及ぶかぎりではない。ましてかよわい女の力で、この道をせきとめる術はない。ただ一路、心のゆくのは天に向つて、卽ち神の奇蹟によつて救はれることであつて、言ひかへれば神に祈りすがるより道がないのであります。

その切端つまつた心が「燒きほろぼさむ天の火もがも」といふ奇蹟的な句を吐かせたのでありまして「がも」の「が」は願望の意味をもつてをります。ですからここは忌まはしいものを燒きほろぼしてしまふだらう天の火がほしいものだ、

と願望をしてゐるのでありまして、一口に言へば「火よ、ふつてくれ」といふせつなる願ひであります。そしてこの異常の叫びは、徒らにキィキィ聲をあげるのとは全然調子のかはつた、熱情をこめた全身的の聲であることに、注意しなければなりません。

(3746) 人の植うる田は植ゑまさず今更に國別れして吾はいかにせむ

同じく流されて行つた宅守に贈つた娘子の歌でありますが、何といふ眞相のこもつた詠みぶりでせう。

歌の意は、

折からの田植時に、田さへ貴方はお植ゑにならないで、といふのは、直接に宅守は田植はしなかつたかもしれないけれど、同じ年頃の人人が田植時に、田野に立ち働いてゐるのをみて詠んだものと、解してもよいと思ひます。いまさら國を距てて遠くお別れしてしまつて、私はどうしたらよいでせうか。と思慕の情を遠く宅守に申し贈つた歌であります。

(3772) 歸りける人來れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて

初めにあつた歌「君がゆく」と共に、この一首は有名な作であります。眞に娘子の性格をそつくり歌に傾け盡したやうなうたひ方で、率直にもの言ふ誠が、古今に類のないほど大膽な句を生み出したのでありませう。

歌の意は、

罪ゆるされて歸つて來た人がやつて來た、といふので嬉しさに、殆んど死にさうでした、その人は貴方樣かと思ひまして。

といふ意味になります。

天平十二年六月に大赦の勅令が出て、幾人か罪あつて流された人が、都へかへ

ることが出來ました。しかしこの時は、宅守はまだ赦されませんでした。

その時の歸つた人人のことを聞いて宅守も交つてゐるかと瞬間喜びのあまり息がとまりさうになつた感動であります。味はひつくせぬ高き調べと、私も感動するばかりであります。

第十七講

ここにときます卷の十六は、萬葉集の中でも特色のある卷でありまして、むづかしく論じてゆけば、限りないものを含んでゐます。昭和十年六月には松岡靜雄氏が「有由緣歌と防人歌」と題して特別な御著書があり、限りなく味はひある一卷として、世に知られてをります。歌について語つて參りませう。

ここに集められた歌はみな、わけのある歌であつて、民間の傳說や、筑前國志賀の白水郎の歌十首および豐前および豐後の白水郎の歌、また能登、越中の歌、合計二十首が集められてゐるのも珍らしく、竹取りの翁が、春の山路で、若菜を煮て遊んでゐる娘たちの群れに逢ひ、たがひに贈答した歌があり、またそのころの乞食の門付の歌にいたるまで集められてあります。

そしてこの時代の都人の生活には、どういふものが取入れられてゐたかといふことも、歌によつて知ることが出來ます。それから滑稽歌といふものが、この卷に集められてあります。

ある時、都の風流人がより集まつて、會をしてをりました。その時三更と夜が更けしづむ頃に、狐の鳴聲が聞えました。それでそこに集まつた人の中に、歌の上手な長忌寸意吉麻呂に、そこにある道具や、狐の鳴聲一切を詠みこんで、歌を作れ作れと強ひて來ました。その聲に應じて、意吉麻呂が詠んだ歌、

(3824) さしなべに湯沸かせ子ども櫟津の檜橋より來む狐に浴む
さむ

この歌は、その場にあつた鍋や湯沸しや、そのとき鳴聲を聞いた狐を、ちやんと歌に詠みこんであります。

「さしなべ」といふことについては、種種に研究されてをりますが、その時代に使用した鍋のことでせう。現代でいへば、たとへば「つる鍋」とか「瀬戸引鍋」とか、鍋の中の一種の名稱なのでせう。歌の意を直接に申してみますと、

さし鍋に湯を沸かせよ、子ども達（そのつぎの「櫟津」は地名です）、そちらの方から、檜で作つた橋を渡つて來る狐に、煮湯をぶつかけてやりませう。

と、當意卽妙に歌ひあげたもので、なかなかの才人であつたことが分ります。

(3835) 勝間田の池は我知る蓮無し然言ふ君が鬚無き如し

この歌は、新田部親王が、お一人あそびをなさつて、お歸りになつたのを知つてゐる女官が、親王のお出ましになつた場所をお聞き申上げると、「自分は勝間田の池を見に行つて來た。その池には、蓮が大變立派に花を咲かせてゐた」とお話になるので、その婦人は親王に戯はむれて、この歌を奉つたのでありまして、歌の意は、

勝間田の池ならば私も知つてをります。しかしそこにはそんな美しい蓮など

はありません。それは丁度さういふことをおつしやる親王さまに、お鬚がないやうなものです。

と、申上げたので、おかくしになつても、よく存じてをります。といふ、裏の心がこめられてあります。

(3841) 佛造る眞朱足らずは水渟る池田の朝臣が鼻の上を穿れ

この歌に由つて知るのは、この時代に、佛像を作ることが隨分流行したであらうことが考へられます。そしてその佛像が、さまざまの色をもつて彩色されたことがわかります。それは、今の奈良の古寺を歩いてみると、自ら首肯けるものであると思ひます。

その彩色の中には、赭土からとつた朱だの、青丹よしと歌はれた青土から取つた青だの、いろいろの彩色をほどこしたらしいのです。

それでこの歌は池田朝臣といふ人が大神朝臣奥守を嗤る歌を贈つたので、それに返歌をしたのでありまして池田朝臣といふ人は佛造りであつたのでせう。そして源氏物語にある、あの末摘花の姫君のやうに鼻の上の所が赤かつたのかも知れません。

とにかくこの歌の意は、

佛を造るのに朱の色が足りなかつたならば、「水渟る」は、池の枕詞でありまして、池田朝臣が、あの赤い鼻の上を穿れば幾らでもある。

と、隨分皮肉を言つてやつた歌であります。

黒色を嗤り咲ふ歌一首

(3844) ぬばたまの斐太の大黒見るごとに巨勢の小黒し念ゆるかも

これも、例によつて皮肉な歌で、斐太朝臣といふ人が丈の高い、色の大變黒い人でありました。

ほかに巨勢朝臣豐人といふ人があつて、その人は、やはり色は黒いが、小柄の

人であつたらしいのです。

歌の意は、

「ぬばたまの」は黑の上にかかる枕詞です。斐太朝臣の大黑をみるたびに、どうしたのか巨勢の小黑が連想されることだ。（斐太の大黑、巨勢の小黑ともに馬の名になぞらへてあります。）

と、言ひ送つたもので、ずゐぶん親しい交際をしてゐた人たちといふことがわかります。つかまへどころが鋭くて、これ等は、いづれも怒るにもおこれないところを、ピシリと言ひ當ててゐるので、痛快であつたのでせう。

答ふる歌一首

(3845) 駒造る土師の志婢麻呂白くあれば諸欲しからむその黑色を

こちらも負けてはゐなくて返歌を送つてゐる。大舍人土師宿禰水通は字名を志婢麻呂と言ひました。この人は人形造り、すなはち埴輪を造る人でありました。

この歌は、巨勢朝臣豐人が、色が黑いのを嗤はれたので、自分がこの歌を作つて、水通に贈つたのであります。歌の意は、

なるほどなア、さういふお前は、土師といふ賤しい土偶造りのことだから、そんなに色が生白い。黑色を欲しがるのも、もつとも千萬だ。

と、やり返したのであります。

これらの歌の味はひには、淡淡とした皮肉があり、滑稽味があり、やはり一種の藝術化がゆきとどいてをります。日本の國には澤山の歌集がありますが、かういふおもしろい味を出した歌は、萬葉集にかぎつて集められてゐる、といつても間違ひはないでせう。

つぎに珍らしい門付の歌を、一つ書いておきませう。

乞食者の詠

(3885) 愛子汝夫の君　居り居りて　物にい行くとは　韓國の　虎とふ神を　生

取りに　八頭取り持ち來　その皮を　疊に刺し　八重疊　平群の山に　四月と　五月の間に　藥獵　仕ふる時に　あしひきの　この片山に　二つ立つ
櫟が本に　梓弓　八つ手挾み　ひめ鏑　八つ手挾み　鹿待つと　吾が居る時
に　さを鹿の來立ち嘆かく　頓に　吾は死ぬべし　おほきみに　吾は仕へむ
吾が角は　御笠の料　吾が耳は　御墨坩　吾が目らは　眞澄の鏡　吾が爪は
御弓の弓弭　吾が毛らは　御筆料　吾が皮は　御箱の皮に　吾が肉は　御
鱠料　吾が肝も　御鱠料　吾がみげは　御鹽の料　着たる奴　吾が身一つ
に　七重花咲く　八重花咲くと　白し賞さね　白し賞さね

この歌は、やはり門付の歌の氣脈をもつてゐる歌でして、人の家の前に立つて、一つの祝歌を歌つてゐる、それは最後の句によつて表はれてゐます。「吾が身一つに七重花咲く　八重花咲くと　白し賞さね　白し賞さね」といふ句は、いかにも枯れた木に花の咲くやうな陽氣な華やかさを持つた句として、私は愛誦いたします。歌をひととほりわかるやうに、お話してみますと、

私の親愛な御方方様、ちやんとお家においでになるくせに、外においでになつたとおつしやるのですか。韓國の虎といふ神を生捕りにして八頭も取りもつて來て、その皮を疊にこしらへ（以上ここまでが平群の序）、平群の山で四月から五月にかけて藥獵に參加するときに、この片山に二株立つてゐる櫟の木のところで梓弓を澤山もつて、ひめ鏑を澤山手にもつて、鹿の出て來るのを、いまかいまかとまつてゐるときに、立派な牡鹿がやつて來て、訴へ嘆いていふことには、「自分はいま死んでしまひませう。さうして大君に御奉公申上げませう。まづ角は御笠を飾る材料、私の耳は墨坩、私の眼はよく澄みきつて鏡のやうに、爪は御弓の弓弭、毛は御筆につくり、皮は御箱の皮になります。それから私の肉は御鱠に、肝も同樣、みげ（腸）は鹽からに作り、この老いはてた我が身一つに、七重八重と花の咲くといふことを、賞めはやして下さい。どうか賞めはやして下さい。」

いかにも可憐な鹿の言葉であり、心であります。同時にこの歌のおもしろさも、そこにこめられてゐるのでありまして、我國の人人のもつ、根本的な素直さを言ひあらはしてをります。このことは本當に尊いことでありまして、日本人たる泉源を探るのには、どうしても古典によるべきだと考へることも、意味のないことではない、といふことがわかります。

第十八講

萬葉集のお話も十七卷にすすみまして、いよいよ終りも近くなつてまゐりました。この十七卷から終りの二十卷に至るまでは、大方同じ體裁をもち、大たいに於て大伴家持の手になつたもので、家持を中心として、主に大伴家の人達の歌が收められてをり、大伴家の歌集とみることが出來ると言はれてをります。

十七卷の特長は天平十八年、家持が越中守として赴いた後、かの地で作つた作が集められてあることで、一つの興味を呼びおこされます。

左大臣橘宿禰、詔に應ずる歌一首

(3922) 降る雪の白髪までに大皇に仕へまつれば貴くもあるか

天平十八年正月に、白雪が澤山に降つて地上に五六寸も積りました。その時に左大臣の橘諸兄卿が、大納言藤原豐成朝臣や、その他大勢の諸王臣等を率ゐて元正天皇の御在所である中宮の西院に參内して、供奉して雪を拂ひました。そのとき詔がありまして、大臣參議また諸王方は大殿の上に侍はしめ、諸卿大夫は南の細殿に侍はしめて、御酒を賜つて酒宴をひらかれました。

そしてその場にをられる方方に、この雪について歌を作れ、と勅が下りましたので、左大臣以下各々が仰せに從つて、雪の歌を奉つたのでありました。

そして、これは左大臣橘諸兄卿のお歌であります。いかにも歌は、雪を中心として詠んだものといひながら、ゆつたりと鷹揚にさすがに大臣の位があつて、立派なお歌だと存じます。歌の意は、

いま降つてゐる雪と同じやうに、私の黑髮が白くなるまで天皇陛下に長くお仕へ申して、御恩澤を蒙ることを思へば、まことに貴くありがたいことである。

と眞情をつつしんで歌に託してありますが、一首全體からうける調子が貴く重重しく誠に心に沁みるものがあります。

一句一句が、謹んで詠みあげられてあるところに、諸兄卿といふ方の自らなる人格が仄めかされてあるものと存じます。いかにも國家の重鎮として、ふさはしい風格と品位の具はつた一首であると存じます。

紀朝臣清人、詔に應ずる歌一首

(3923) 天の下すでに覆ひて降る雪の光を見ればたふとくもあるか

この清人といふ方は、時の東宮にもお仕へ申した方であると申されます。この歌も前の歌に次いで、同じ時に心謹んで降る雪を眺め、しみじみと湧き來る感慨を歌ひあげたものとして、氣品のある一首となつて居ります。歌のこころは、

天の下を全く覆うて降る雪の光を見れば天皇陛下の御威德も偲ばれて、如何にも貴くありがたいことである。

と謹んで歌つてをります。まことにこの歌をよんでゐると、貴くすがすがしい心地になつてまゐります。そこが歌の限りない價値になるところで、地上一面降り積つた雪の美しさ、清かさ、その風光を心靈に深く寫して、自ら湧き來る思ひを貴び、大君を讃へた、めでたい歌をつつしんで愛誦いたします。

大伴宿禰家持、詔に應ずる歌一首

(3926) 大宮の内にも外にも光るまで零らす白雪見れど飽かぬかも

この歌は率直に詠まれてあるのが、よいのでありまして、家持は、從五位下でありました。歌を譯してみますと、

御所の内にも外にも光り輝くまでに、美しく零つてゐる雪は、見ても見ても幾度見ても飽かぬことである。

といふのでありまして、特にかまへた所がなく、丁度白雪のやうに淡淡とした上品さが一首の上に流れてをります。まことに家持の作の中では珍らしい程くせのない結構な歌として、愛誦おくあたはぬものがあります。

平群氏女郎、越中守大伴宿禰家持に贈れる歌

(3931) 君により吾が名はすでに立田山絶えたる戀のしげき頃かも

この歌は平群氏女郎といふ婦人が、越中守となつた大伴家持に贈つた歌であります。

この女郎は、この卷になつて始めて名が表はれた婦人で、どういふ人であつたかといふ傳記は詳かでありません。家持を遠慮がちに好いてゐたといふ心持がわかります。この歌を譯してみますと、

貴方樣ゆゑに私の名はもはや立つてしまひました。（立田山と山になぞらへて、三句で一寸切れて四句の「絶えたる」をつづけた手際が、嫌味にならないで、何とも言へず微妙な響をもつてゐるところが、えもいへぬ味はひとなつてをります。）名はたつたけれど、お互の思ひはとだえてをつたのでせう。

その思ひが、この頃再びしげくなりました。

といひ贈つた歌であります。一首の調子がすらすらと心よいリズムをもつてひびいて參ります。この人はさう身分は高くなかつたかも知れませんが、かなりな才女であるらしいその俤が、うかがはれる歌ではありませんか。

(394) 松の花花數にしも我背子が思へらなくにもとな咲きつつ

同じく平群氏女郎が、越中守家持に贈つたつつましい歌でありまして、實に奥床しい女らしい味はひ深い歌であると、よむたびに思はせられることであります。歌の意を申してみますと、

第一句に「松の花」と花の中で目立たない質素な地味な花を選みだして、一番上によみ、つつましく遠慮深い心をあらはしてをります。

松の花などは見た目に美しくもなく、さして目立たない儚い花でありますから「花數にしも」とひたすらに自分自身をへり下つて考へてよんだらしいのです。

自分のやうな儚いものは、ものの數とも貴方様はお思ひになられてをりませんのに、それでもやはり咲いてゐるその花のやうに、貴方様は私などをお心にもおかけ下さらないのでせうけれど、私はそれでも、勿體なく蔭ながら思ひつづけてをります。

といふやうな一種の諦めをもつて詠みいだされた歌の調子に、何ともいへぬ可憐な味がこもつてをります。

家持は名家大伴家の御曹子として、華やかに生ひたつた身分の貴い人でありましたから、普通の人人からみれば、身のほどを知らぬ思ひとも自ら深く戒めたり、諦めたりしたのでせう。

その感情がよく表はれてをりまして、そのつつましい心の姿に惹きつけられるものが、あるのであります。

(4001)　立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし

家持の歌でありまして、有名な越中の立山が、今日とさして變らず雄大にその姿を見せてゐる、夏もなほとけやらぬ峯の白雪をみて「神からならし」といふ句を思はず言つたのであらうと思はれる、清清しい驚きの感情のあらはれた歌であります。

歌の意は、

立山に降つてゐる雪を夏の日に常にみてゐても飽きることのない、かうした奇しき眺めは、この山が貴い神樣であるからであらう。

と夏も雪を頂にもつてゐる珍らしい風景に感嘆して詠み出された一首であります。夏も雪を戴いてゐる高い山を詠んだ歌として、氣持よくよまれてあります。

礪波郡雄神河の邊にて作れる歌

(4021)　雄神河くれなゐにほふ少女らし葦附採ると瀬に立たすらし

家持は越中國の守として、折にふれてはおかみの用事をもつて諸郡を巡行しました。

そして今日でいへば、都會育ちの人が田舍の風景を見るやうに新鮮なその風物に歌心を刺戟されて作つた歌が幾つかありますが、この書いた歌もさうした際に出來た歌の一首でありませう。

雄神河は、今は庄河と呼ばれ、射水川と竝んで海にそそいでゐる河ださうです。

雄神河にくれなゐの色が美くしく匂ふ、それは少女等が、葦附といふのは作者の自註に「水松の類」とありますやうに水藻の一種で、いまもその地に產

してゐるさうであります。その藻を採りに河に立つてゐるらしい。

と特色ある地方風物を詠じてをります。家持のやうな人が越中の片田舎を歩いて見聞した風物を直ちに歌つてゐるところに限りないおもしろ味があります。「くれなゐ匂ふ」は少女を修飾した言葉でもありませうが、またやはりこの時代にも少女達は裾をかかげて、赤い布を見せて水に浸つてゐたかと微笑ましく想像されることです。

第十九講

ここに書かうとする第十八巻は、前にも述べた如く、十七巻の續きをうけ大伴家持を中心に詠まれた歌が集めてあり、編輯者は古來、家持であらうと推定されてをります。

家持といふ人は非常に歌を好む人であつたらしいが、それがさまざまのこころみを歌の上でさせてゐます。それは家持は歌の好きなあまり、古代の人の歌や詩を繰返しよんで、その字句が身にしみてゐるかして、たとへば「ほととぎす」といふ名を聞いただけで、一種懐古的の憧れ心に捉へられて割合平凡な歌を作つてしまふ。そして創意が割合に類似的で、よんでそれほど新鮮でないのも、家持としては非常に古へに憧れるので興深く思ふのでありますが、第三者からみるとそ

れほどでもないといふ氣の毒な結果になる歌も、相當に詠み殘されてあると思ひます。

霍公鳥の喧くを聞きて作れる歌

(4119) いにしへよ偲びにければほとときす鳴く聲聞きて戀しきものを

これらの歌は、歌をよんでみましてもさういつた心持がよく出てゐると思ひます。越中國邊りにをれば、時鳥をきくことなどは、少しも珍らしいことではないのでせう。けれど時鳥は昔から多くの人人に歌に詠まれて愛でられてをります。それでその聲が一層になつかしまれたやうです。

「いにしへよ」の「よ」は感動の「よ」ではなく「いにしへより」の「よ」であります。「昔から」といふことになります。

昔から人人が戀偲んで來た鳥であるから、いまその鳴く聲を聞いて、私も戀しく思ふことだ。

といふ意を表はしたものであります。この家持の歌好きであつたといふことは、何となくよい感じを與へ、親しみ深くその人柄を目にみるやうに思はれます。

しかし家持はその他に名家大伴家を背負つて立つてゐる自分であるから、祖先の名を揚げて、さらに偉大なものとしなければならない、といふ強い責任感を負うてをりました。

大伴家は前にも申したやうに、代代朝廷に「武」をもつてお仕へ申し、特に武を司る家として傳はつて來たほどの名家でありましたから、おそれおほいことながら、天皇に對し奉つても、純粹無垢の忠勤の志をもつてをりました。さうした歌について申述べてみませう。

陸奥國より金を出せる詔書を賀ぐ歌

(4094) 葦原の　瑞穂の國を　天降り　しらしめしける　天皇の　神の命の　御代重